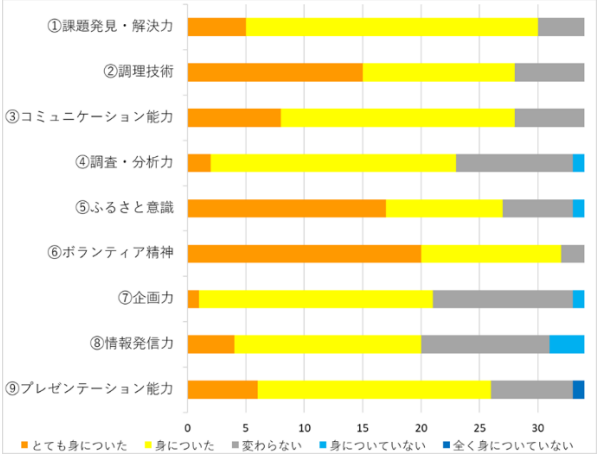
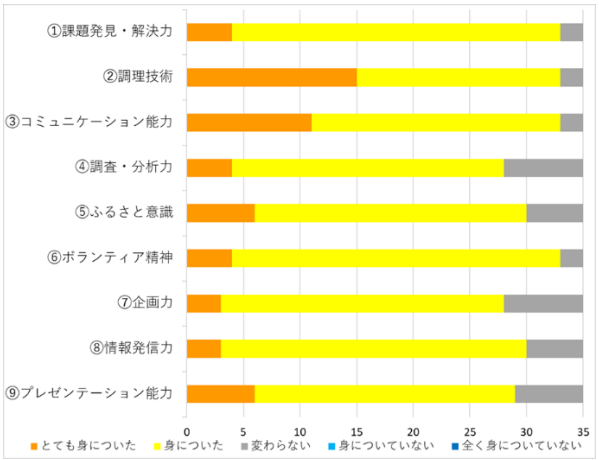
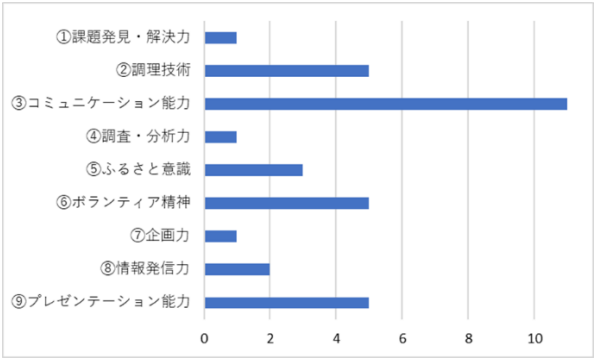
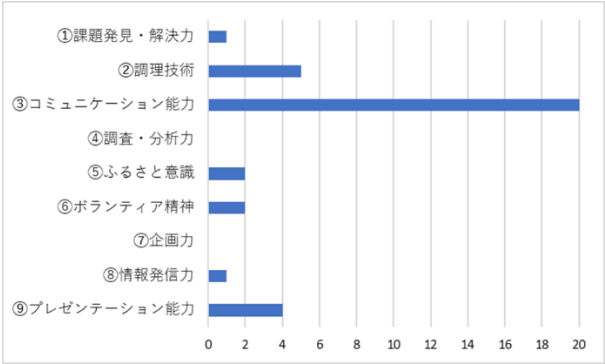
ウ　実施効果とその評価

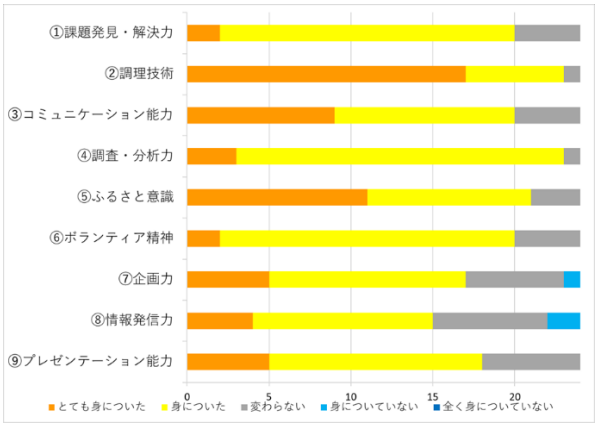
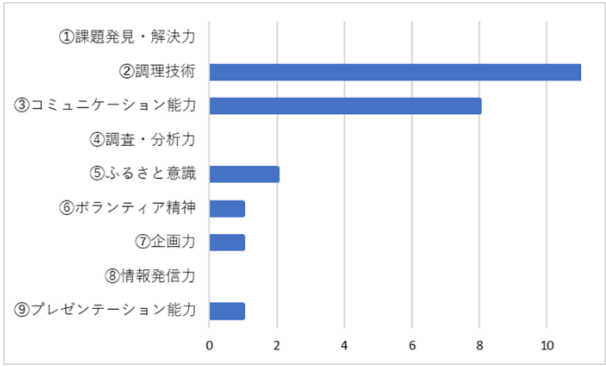
本事業全体を通して、生徒に自己評価アンケートを行った。3年間の研究対象生である 75 回生の経年比較と令和 4 年度の 2 年生(76 回生)の効果を提示する。

【自分に身についた・向上したと思う力】

令和 3 年度（75 回生）	令和 4 年度（75 回生）
	

【最も身についた・向上したと思う力】

令和 3 年度（75 回生）	令和 4 年度（75 回生）
	

令和 4 年度 76 回生 【自分に身についた・向上したと思う力】	令和 4 年度 76 回生 【最も身についた・向上したと思う力】
	

【最も身についたと思う理由】

①　自分で課題を見つけて解決方法を考える力（課題発見・解決力）

・目標を達成するために、自分でどのように行動するべきか考えられるようになったから。(75 回生)

②　調理実習や焼き菓子製作など調理の技術（調理技術）

・高校生カフェや高校生レストランを通じて、普段作らないような料理を作ることができ、イベントも成功し食物検定１級にも合格できたから。(75 回生)

・大量調理技術や栄養バランスを考えるなど、たくさんのスキルを身に付けられたから。(76 回生)

・家政科に入るまであまり調理をしていなかったけど、調理実習を通して効率よく作業できるようになったから。この学科に入って本当に良かったと思っています。(76 回生)

・商品開発では、改善をする時に材料の分量や混ぜるタイミングなど工夫するたくさんの技術が身に付いたから。(76 回生)

③　グループワークや外部講師、地域の方々との交流がスムーズにできる(コミュニケーション能力)

・地域交流で、どんな世代の人とでもすぐに会話を弾ませられるようになったから。(75 回生)

・高校入学までは人と話すことが苦手でしたが、訪問サービスなどを通じて話すことに対する苦手意識がなくなったから。(75 回生)

・1 年生の時に比べて自分から積極的に話し、意見も出すようになったから。(75 回生)

・地域の方々と話し関わる機会が増え、緊張はするけど交流ができたり意見を言えたりと自分の成長を感じるから。(76 回生)

・商品開発の販売や産業教育フェアのワークショップで、緊張しながらも自分から話しかけることができていたから。(76 回生)

・地域の高齢者や小学生など幅広い年齢層の方と交流を深めることができ、発表や意見交換の場で向上したと思ったから。(76 回生)

⑤　自分が地域にできることで地域と交流や貢献がしたいと思う気持ち（ふるさと意識）

・佐用町の方々に温かさを 3 年間で感じ、貢献して笑顔にしたいと思う気持ちが向上した。(75 回生)

・これまであまりボランティアを行ったことがなかったけど、商品開発や防災訓練で地域と交流してみて、楽しさややりがいを感じたから。(76 回生)

⑥　困っている人や地域の課題解決のために役に立ちたいと思う（ボランティア精神）

・誰かのために何かをすることは、人とのつながりが大切だと学べたから。(75 回生)

・防災訓練を行って佐用高校は地域の方々に期待してもらっているし、その分私達もできることは全力でやりたいと思うようになったから。(76 回生)

⑦　地域と協働で活動する時に自分で計画を立てられる力（企画力）

・防災訓練を自分たちで企画してみんなに分かりやすくする工夫をし、反省点もありますが成功したことで自信につながったから。(76 回生)

⑧　自分が行った活動を地域の内外に知ってもらうように発信ができる力（情報発信力）

・自分なりに広報する方法を考えたり、パソコンを使ってチラシやポスターを作ったりすることに取り組んだから。(75 回生)

⑨　自分が行った活動を周囲に知ってもらうために説明できる力（プレゼンテーション能力）

・授業や研究成果発表会、全国産業教育フェアなど何度も発表を行っていくうちに、スライド作りや発表がスムーズにできるようになったから。(75 回生)

・インターンシップ報告会や課題研究の発表会で人前に出て話す時に、相手に伝わりやすいように意識することができたから。(76 回生)

（２）生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫

ア 仮説

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安全・安心なまちづくりの３本柱を立て、それぞれについて、生徒が課題を発見し、ＰＤＣＡサイクルを展開していくことにより、課題を解決できる資質・能力を身につけることを目標としている。このような力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能をベースに主体的な態度で取り組み、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力が必要になってくる。そこで本研究では、生徒が行うＰＤＣＡサイクルに対して、教員が次のような指導法を行うことにより、生徒が課題解決に向けて積極的に取り組み、主体的な態度を育成できると仮説をたてた。

生徒の活動	教員の指導姿勢
P （計画）	「共に考え待つ」 生徒の自主的な活動を待つ姿勢
D （実行）	「共に行動し見守る」 教員は側について見守る
C （評価）	「共に振り返り褒める」 良いところを見つけ褒める姿勢
A （改善）	「共に改め期待する」 生徒の挑戦を信じて期待する姿勢

①　Ｐ（計画）・・・・「共に考え待つ」

生徒が主体的に取り組めるように教員からの指導助言は控え、自由な発想で取組を考えさせていく雰囲気をつくる。生徒は自分が中心となって考え出したことに対しては、積極的に責任を持って取り組む傾向がみられ、その中で主体性が育まれていく。教員には、生徒の自発的な考えを「待つ」姿勢が効果的であり、話し合いが進展していかない時に備え、事前に参加していただく方に取組の趣旨や目標を説明し地域の方々からさりげなくヒントやアドバイスを会議の中で出していただくよう依頼をする等の仕掛けをしておくことが大切である。

②　Ｄ（実行）・・・・「共に行動し見守る」

現場に出て生徒が考えた取組を実践していく場面において、教員は危険なことが予想されない限り、生徒の取組にその場では指導助言をしない。教員は生徒側について、「見守る」姿勢を通すことで生徒が失敗をするかもしれないが、それは失敗として経験をさせる。それらの活動に対して生徒に責任感を持たせ、生徒自身に主体性を持たせることができた。

③　Ｃ（評価）・・・・「共に振り返り褒める」

取組ごとに生徒が自己評価を行い、うまくいった点・うまくいかなかった点などを整理し、結果を正しく把握させる。特に、うまくいかなかった点についてはその原因の分析を、生徒同士に十分に話し合わせる。そして生徒の取組結果や姿勢に対して、良いところを探して、必ず「褒める」ことが大切である。褒められたことにより自己肯定感を高めることで生徒の自信となり、主体性の育成につながる。

④　Ａ（改善）・・・・「共に改め期待する」

評価をもとに次回に向けての改善点を生徒同士に話し合わせる。改善策に行き詰まった場合は、改善策を考えるためのヒントを与えるだけで、あくまでも自分たちで考えさせる。次回は生徒がよりよい活動をしてくれることを信じて「期待する」ことが大切である。その期待感が生徒に伝わり、一層の主体性を引き出すことにつながる。

イ 活動実績

令和４年度の生徒の主体的な取組と教員の指導については下記のとおりである。

①２学年「課題研究（食物班）」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
４月			関係機関との打ち合わせ
５月	商品開発に関する講義 講師：今年度参加外部講師	商品開発に関する基礎知識の習得	商品開発会議年間計画作成
６月	第１回商品開発会議 第２回商品開発会議	**開発に向けての話し合いとワークショップ** **開発商品の探究活動** **レシピ考案** 試作調理（１回目） 試作調理（２回目） **レシピの改善**	外部講師との打ち合わせ 外部講師との打ち合わせ 試作品試食会準備
７月	第３回商品開発会議	試作調理（３回目） **レシピの改善**	外部講師との打ち合わせ 課題と２学期以降の計画
８月		パッケージの考案 ※夏季休業課題	
９月	第４回商品開発会議 第５回商品開発会議	試作調理（４回目） **レシピの再改善** 試食会（５回目） **レシピの完成、ラベル考案、容器決定**	外部講師との打ち合わせ 外部講師との打ち合わせ
１０月	第６回商品開発会議	**ラベル決定** イベントに向けての準備 チラシやポップの作成	「姫音祭」実行委員会会議参加 外部講師との打ち合わせ
１１月	第７回商品開発会議 「姫音祭」にて開発商品広報即売会 場所：姫路城大手前公園 対象：イベント参加者	イベントに向けての準備 販売商品にラベルを貼る **イベント参加で広報活動**	外部講師との打ち合わせ イベント生徒引率
１２月	第８回商品開発会議	一年間の振り返り	外部講師との打ち合わせ
１月		課題研究発表会に向けての準備	
２月	課題研究発表会	研究内容の発表 商品開発の振り返り	
３月			

②２学年「課題研究（福祉班)」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
４月			各方面へ講師依頼
５月			
６月	合同防災訓練企画開始 「佐用町の災害について」 講師：ドローン協会　久保様 「子供の減災教育」 講師：防災士　小西様	減災について知識習得 **防災訓練実施内容の計画** 災害・防災について知識習得	佐用町、関係機関との打ち合わせ
７月	防災訓練における仮説の設定	**グループワークによる仮説設定** **防災訓練実施内容の詳細計画**	ワークシートの作成 関係各所との実施内容確認
８月			
９月	第１回合同企画会議	**防災訓練内容案提示** **関係機関との意見交換**	
１０月	「防災講義とワークショップ」 講師：兵庫県立大学　木村玲欧教授、兵庫県立大学学生 「防災推進国民大会」参加	防災についての知識習得 大学生とのワークショップ **ポスターセッション参加**	佐用消防署協力依頼 兵庫県立大学、佐用町との内容確認 イベント生徒引率
１１月	第２回合同企画会議 防災訓練準備 「防災出前授業と備蓄食ワークショップ」 対象：佐用小学校１年生	**防災訓練細案の意見交換** **パッククッキング試作調理、災害食講義スライド作成、「防災リーフレット」作成、ドローン放送原稿作成、各体験リハーサル** **小学生向け防災講義とキャンディーレイ作成指導**	佐用町関係機関との細案打ち合わせ 佐用小学校との打ち合わせ イベント生徒引率
１２月	「佐用合同防災訓練～KIZUNA大作戦～」実施 防災訓練アンケート集計	**各部署でリーダーになり訓練の運営指揮** 本校２学年対象：**災害食講義とパッククッキング指導** 佐用小学校１年生対象：**段ボールベッド体験** 近隣住民対象：**災害時小物制作ワークショップ、フレイル予防体操** アンケートの集計、振り返り	防災訓練リーダー生徒のバックアップ
１月		課題研究発表会に向けての準備	
２月	課題研究発表会	研究内容の発表 合同防災訓練振り返り	関係機関への発表会参加依頼
３月		**次年度に向けての引継ぎ資料作成**	

③２学年「ヒューマンサービス」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
４月			給食サービス打ち合わせ 各方面へ講義依頼
５月	第１回給食サービス準備 ルーブリック評価説明 地域の実態確認	お弁当献立の作成 佐用学の振り返りと佐用町の課題発見	社会福祉協議会との連携
６月	第１回給食サービス 「佐用町の現状」講義 講師：佐用町高年介護課職員 「高齢者の栄養と食生活」講義 講師：佐用町健康福祉課職員 「ほのぼのクッキング」参加	お弁当調理（６４食） アンケートはがき、お品書き作成 佐用町の取組について知識習得 高齢者向けのお弁当献立作成について 地域住民との調理実習	 地域施設への生徒引率
７月	第２回給食サービス準備	お弁当献立の作成	社会福祉協議会との連携
８月			
９月	第２回給食サービス 第３回給食サービス準備	お弁当調理（７０食） アンケートはがき、お品書き作成 お弁当献立の作成	 社会福祉協議会との連携
１０月	第３回給食サービス 第４回給食サービス準備	お弁当調理（６３食） アンケートはがき、お品書き作成 お弁当献立の作成	 社会福祉協議会との連携
１１月	第４回給食サービス 「ほのぼのクッキング」参加	お弁当調理（５６食） アンケートはがき、お品書き作成 地域住民との調理実習	 地域施設への生徒引率
１２月	「みらい甲子園」応募	**地域課題解決アクションプランの作成**	給食サービス：次年度の日程調整 振り返りアンケート作成
１月	まとめ	一年間の振り返りとアンケート	
２月		次年度に向けての計画	
３月			

④３学年「ヒューマンサービスⅡ」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
４月	昨年度の反省	**グループ学習による意見交換**	ワークシート作成
５月	仮説の検証 交流内容の検討	**グループ学習による意見交換** 司会を立て、意見をまとめた	ワークシート作成
６月	訪問グループ分け 計画書作成	**グループごとに計画書作成**	計画書作成
７月	訪問準備	コミュニケーションカード作成	
８月	訪問先決定		高齢者世帯への承諾確認（社会福祉協議会、自治会長から紹介） 経路確認、地図作成
９月	リハーサル 第１回訪問サービス 振り返り	自己評価、他者評価 高齢者世帯訪問、**生活アンケートと交流** 自己評価	評価表、交流メモ作成 高齢者世帯巡回 振り返りシート作成
１０月	訪問準備 リハーサル 第２回訪問サービス 振り返り	**アンケートを考察し内容検討** 自己評価、他者評価 高齢者世帯訪問、**各グループ考案レクリエーション** 自己評価	評価表、交流メモ作成 高齢者世帯巡回 振り返りシート作成
１１月	訪問準備 リハーサル 第３回訪問サービス 振り返り	**アンケートを考察し内容検討** 自己評価、他者評価 高齢者世帯訪問、**各グループ考案レクリエーション** 自己評価	評価表、交流メモ作成 高齢者世帯巡回 振り返りシート作成
１２月	訪問準備 第４回訪問サービス 振り返り、まとめ	**フォトフレーム作成、アンケート内容検討** 高齢者世帯訪問、**聞き取りアンケートと交流** 自己評価	交流メモ作成 高齢者世帯巡回 振り返りシート作成
１月	お礼状書き	お礼状下書き、清書	お礼状確認 郵送
２月			
３月			

⑤３学年「フードスペシャリスト」指導過程

時期	内容	生徒の主体的な取組	教員の指導（動き）
４月	各種コンテスト応募	チーワングランプリに向けた内容検討	日本調理製菓専門学校への依頼
５月	食改善レシピ本完成に向けて①	**献立グループ決め** **レイアウト検討**	チーワングランプリ応募
６月	食改善レシピ本完成に向けて② 「レシピ本作成について」講義（日本調理製菓専門学校）	**ターゲット、テーマ決め** レシピ本製作に関する知識習得 介護食や栄養価計算に関する知識習得	校外学習生徒引率 glaminka 打合せ
７月	食改善レシピ本完成に向けて③	第１回レシピ本試作、試食、評価	
８月		**高校生レストランの内容検討**	夏季課題の作成
９月	食改善レシピ本完成に向けて④ 高校生レストランに向けて 「glaminka 佐用」講義 講師：glaminka 佐用職員 「高校生レストランに向けて」講義（日本調理製菓専門学校）	献立の再検討 カロリー、栄養価計算 **レストランの内容検討** **プレゼン準備** glaminka についての知識習得 レストランの企画運営の知識習得 接客作法の技術習得	校外学習生徒引率 glaminka 打合せ
１０月	食改善レシピ本完成に向けて⑤ 第１回高校生レストラン	第２回レシピ本試作、試食、評価 献立の再々検討 カロリー、栄養価計算 レストラン事前試作、準備 ピザづくり、**プレゼン**	glaminka 生徒引率
１１月	食改善レシピ本完成に向けて⑥ 第２回高校生レストラン	第３回レシピ本試作、試食、評価 献立決定、カロリー、栄養価計算 レシピ本作成 レストラン事前試作、準備 ピザづくり、**プレゼン**	glaminka 生徒引率
１２月	食改善レシピ本完成に向けて⑦ 第３回高校生レストラン	レシピ本作成、製本 高校生訪問サービスで配布 レストラン事前試作、準備 ピザづくり、**プレゼン**	glaminka 生徒引率
１月	まとめ	一年間の振り返りとまとめ	

ウ　実施効果とその評価

(1) 高校生訪問サービスを終えた生徒の感想

今年度の生徒はカリキュラムの関係上、訪問サービスを二年連続で行った学年である。経験や慣れがあったため、最初から意気込みがありプラスの発想で実施できた生徒が大半であった。

【赤線（プラス思考の発想）】

私達が訪問させていただいたご夫婦は1回目の訪問から毎回温かく迎えてくださり、訪問実施前はとても緊張していたのですが、すぐに話が弾み緊張はすぐに無くなりました。一番印象に残っている事は、私達が作っていったプレゼントやレクリエーションの時に一緒に作った物などを全て部屋に飾って下さっていた事です。プレゼントなどは、毎回ご夫婦の趣味に合った物や好きな色を使って作っていたので、実際に飾っているのを見た時にとても嬉しい気持ちでいっぱいになりました。また、訪問サービスの中で苦労した事は久夫さんは手先を使った事が苦手で、寿子さんは逆に手先がとても器用な方で、久夫さんは、積極的にお話をして下さり、寿子さんは逆にあまり会話が得意な方ではなかったので、お二方とも楽しんでもらえるレクリエーションを考えるのがとても大変でした。中村さんと一緒に意見を出しながらレクリエーションを考えていたのですが、毎回とても喜んで下さるので、回を重ねるごとに、もっと喜んでもらいたいと、考える時間が楽しくなりました。また、会話をする中で、高校生くらいの若い人と話す機会が無いから楽しいと言って下さり、月に1回程会う子どもさんに、「この訪問サービスの話をしたんや！」という風に言って下さり、私達が行っている訪問サービスがこんなにも高齢者の方に喜んでもらっているのかと思いました最終日に、「おつかれさま！」と言われた際に一気に大きなやりがい、達成感と同時に、少しさみしく思い、コミュニケーション力や、考える力をこの訪問サービスで得られ自分自身の成長を感じ、訪問サービスをする事ができてよかったです。

(2)給食サービス実施後の利用者からの返信はがき

手書きの部分を付けることで、利用者の方に温かみを届ける工夫をしている。三年目にもなると、メッセージ欄に書ききれないほどの返信はがきが増えたことから、利用者の方が楽しみにしてくださっている様子が分かる。

こんにちは。佐用高校家政科です。
よろしければ アンケートに答えていただき、
お弁当の感想などを教えてください。
ご協力お願いします。

1. 味付けはどうでしたか？
【 濃い ・ ちょうどよい ・ 薄い 】
2. 量は多かったですか？
【 多い ・ ちょうどよい ・ 少ない 】
3. 今回のお弁当で一番おいしかったものを教えてください。
【 インゲンのごまあえ 】
4. メッセージがあればお願いします。
ボランティアでありがとう

アンケートはポストへ投函してください。

こんにちは。佐用高校家政科です。
よろしければ、アンケートに答えていただき、お弁当の感想などを教えてください。ご協力お願いします。

1. 味付けはどうでしたか？
【 濃い ・ ちょうどよい ・ 薄い 】
2. 量は多かったですか？
【 多い ・ ちょうどよい ・ 少ない 】
3. 今回のお弁当で一番おいしかったものを教えてください。
【 鶏のオイル焼き 】
4. メッセージがあればお願いします。
ありがとう

アンケートはポストへ投函してください。

こんにちは。佐用高校家政科です。よろしければアンケートに答えていただき、お弁当の感想などを教えてください。ご協力お願いします。

1. 味付けはどうでしたか？
【 濃い ・ ちょうどよい ・ 薄い 】
2. 今回のお弁当でおいしかった料理は何でしたか？(複数可)
【 鶏肉あんかけ ・ かぼちゃの煮物 ・ トマトの和え物 ・ わかめご飯 】
3. 今後入れて欲しい料理やメッセージがあればお願いします。
食べる人の年令、立場を考慮され
ごはんは柔らかめ、秋の食材のおかず
一杯が頂いています。完食しました。
私(主人)も味見させて頂きました。
家政科のみなさん、ありがとうございました。

アンケートはポストへ投函してください。
9/16お弁当

こんにちは。佐用高校家政科です。
よろしければアンケートに答えていただき、お弁当の感想などを教えてください。ご協力お願いします。

1. 味付けはどうでしたか？
【 濃い ・ ちょうどよい ・ 薄い 】
2. 今回のお弁当でおいしかった料理は何でしたか？(複数可)
【 しょうが焼き ・ ジャコポテ 梅風味のさっぱりサラダ ・ ごはん 】
とくにおいしかったです。
どれもおいしかったです!!
3. 今後入れて欲しい料理やメッセージがあればお願いします。
今後入れていただきたいのは、梅干しです。おかずはいろいろレパートリーがあって大満足です。いつもどんな料理が届くのか楽しみです。

アンケートはポストへ投函してください。
ちなみに、私は、65年前の佐用高校家政科卒業生です。
6/24お弁当

(3)給食サービス実施後の生徒の感想

自分たちで献立から考え調理を行うことへの不安や、利用者の方とのやりとりが見えない中で実施することに対する不安やマイナスな発想から、実施後はやりがいや達成感、自信へとつながっていることが分かる。また、利用者からの温かい言葉が生徒の自己肯定感の向上に寄与している。

【青線（事前の不安等）赤線（事後の肯定感等）】

このヒューマンサービスの授業を通して、地域の方を少しだけど、たくさん知ることができました。一方的に作って渡すのではなく反応をはがきで見ることができるのが一番うれしかったです。献立から考えるのは、高齢者の方がどのような物が食べやすいか、体に優しいか、彩りはいいか考える事がたくさんあってとても難しかったです。高齢者だからという思いで野菜ばっかりを使っても肉や魚がなくて、それをして揚げ物にすると衣がかたくなってしまうから歯にはよくないからどういうものがいいか適当に考えてはいけないということが分かりました。献立が決まってもその料理は大量調理には向いているのか、献立の上に調理の仕方などを考えないといけないのにとても苦労しました。実際の給食サービスでは、時間に間に合うようにテキパキとしないといけないし、自分が思っているよりとても難しかったし時間が過ぎるのが早かったです。給食サービスの実施前は本当に思いは届くのか、私達の頑張りは、届いてくれるのかなどそういう思いがありました。頑張っても…という思いがあったけど、実施後は、届いてほしいという気持ちで給食サービスに取り組み、一つ一つ心を込めてはがきを書いたり作ったりしました。その思いもあって毎回の返信はがきを読むのがとても楽しみになりました。おいしかった、また食べたい、これからも頑張ってという声を聞くと、私達の頑張りが届いてよかったと思いました。これから地域の方とのもっとかかわれる機会が欲しいとさらに思ったし、2年生の活動を通して、献立の立て方や大量調理の仕方などをみかしほ学園や先生方に教わることができてこれから体験できるか分からないことを経験をさせてもらうことができ自分も成長することができました

(4)佐用合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～実施後の生徒の感想

1 学年の時から防災訓練の補助活動を行って、企画運営に対して意欲はあるが、自分たちで実施することに対する不安な気持ちを抱えている。時間の経過とともに徐々に自信を付けていっている。実施後は知識や技術が身についた自分を肯定する表現も見られる。

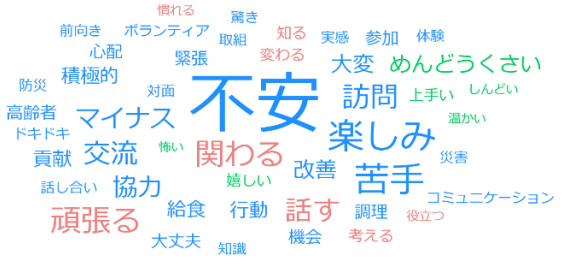
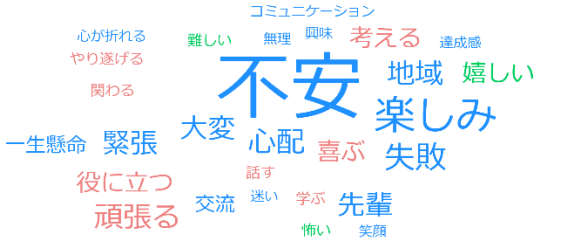
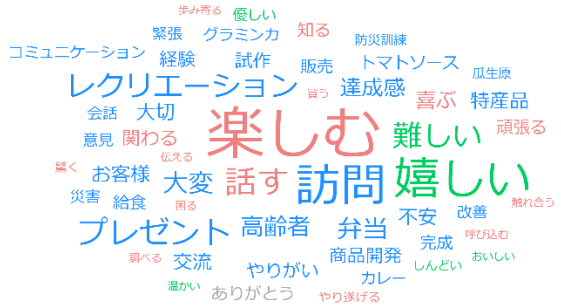
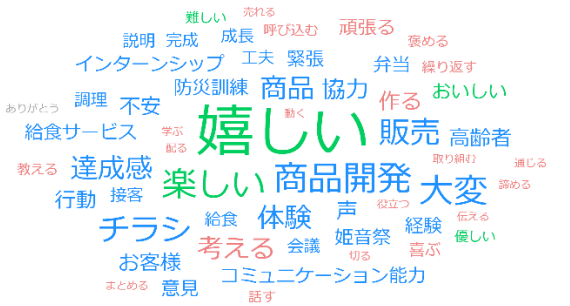
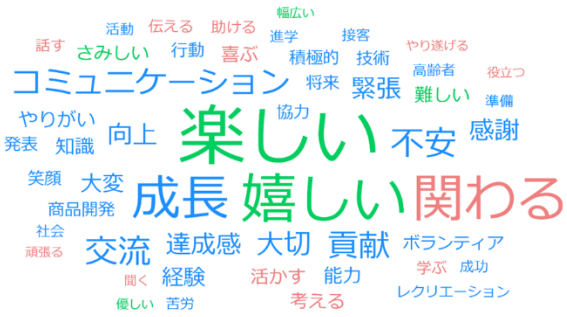
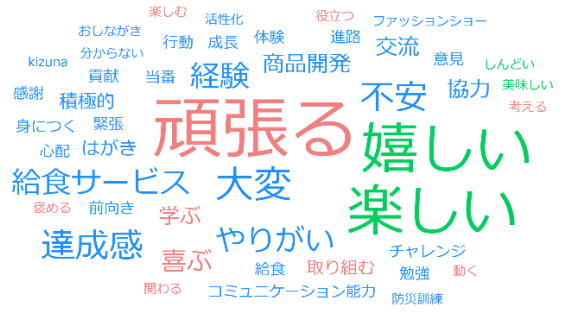
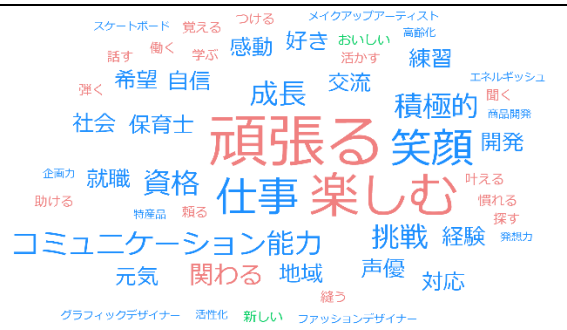
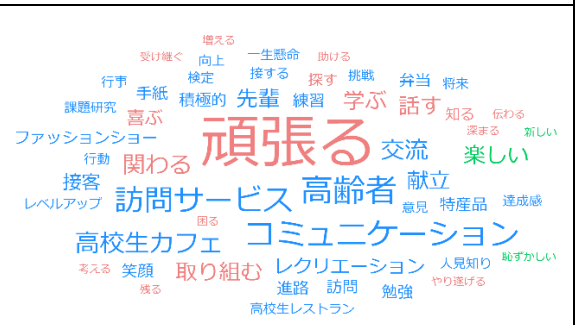
【青線（事前の不安等）赤線（事後の肯定感等）】

「佐用合同防災訓練～ＫＩＺＵＮＡ大作戦～を振り返って」

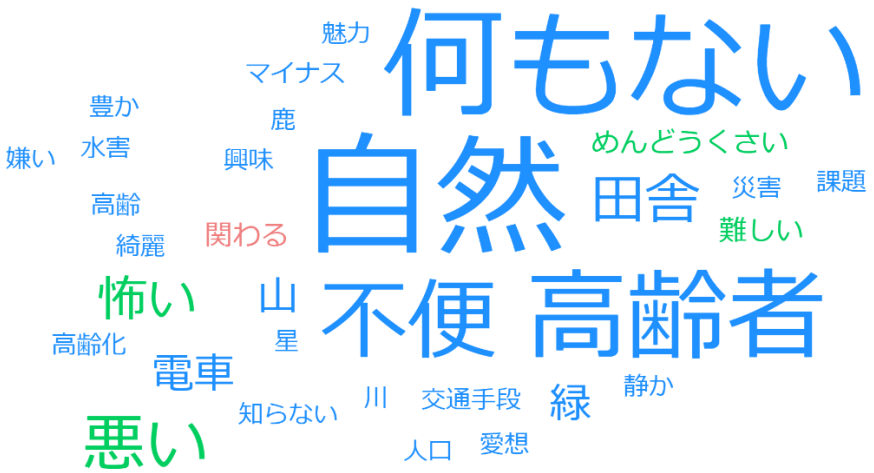
私は1年生の頃から福祉にすると強く思っていたのでこの一年間はとても有意義で充実した時間でした。福祉ではたくさんの力が見に付いたと思っています。最初の頃は先生に言われた事しかできず反省点がたくさんありましたが、防災訓練に向けてみんなと協力し、自分から積極的に行動していく事ができました。防災訓練に向けて、防災団体に福祉で参加した事や講義を受けた事で防災の意識が身に付いていく事が嬉しかったです。初めは防災の事をくわしく知らず不安な気持ちもありましたが学ぶ機会がたくさんあり防災について学んでいく事が楽しくて仕方がなかったです。その身に付けた知識を存分に発揮する事ができたのが防災訓練でした。レシピ作りや講義内容など今までの知識がとても役に立ち学ぶ事の大切さと成功につながったと実感しました。防災訓練が近づいていくうちに、話し合いが増えていき自分の意見を言う機会が多くありました。意見を言ったりする事はあまり得意ではなく否定されたりしないか不安に思っていましたがみんなとの話し合いは新たなアイデア交換や思っている事を言い合え、お互いを高めあえる事に気付きました。今までの考え方ではなく、違う視点から捉えて物事を学ぶ力が身に付きました。事前準備やドローンリハーサルなど本番に向けて緊張感を持ちながら一生懸命取組む事ができ、とても満足のいく防災訓練でした。本番の講義では、一年生と一緒にスムーズに進行できました。自分達で考えたパワーポイントやパッククッキングなど大勢の方に知ってもらえた事が何よりも嬉しかったです。自分達の今までの取組みが形になったのがとても誇らしかったです。このような町全体で行う防災訓練もっと広まり、この活動が佐用高校家政科で受け継がれていってほしいです。

(5)「AI テキストマイニング」によるデータ分析

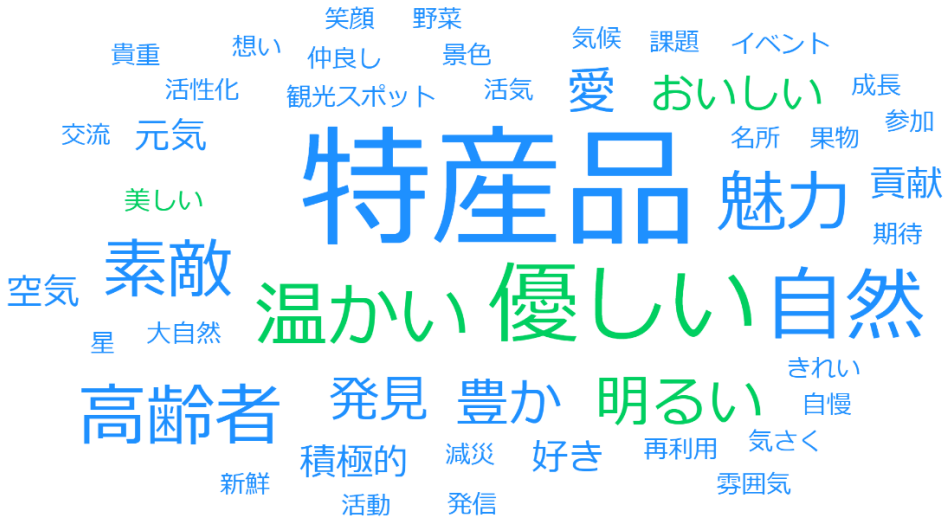
地域協働に対する生徒の感想を「AI テキストマイニング」によりデータ分析した。今年度は、２学年と３学年に実施した。いずれの学年においても事前から事後にかけては不安からプラスな意気込みへの変化が見られる。また、次の活動への意欲的な姿勢も研究の成果である。本事業対象の学年にいたっては、佐用町のイメージや愛着への大きな変化も見られる。

３学年（75 回生）	２学年（76 回生）
【質問１】様々な地域協働活動を始めるときの心境はどうでしたか。	
	
【質問２】自分が携わった地域協働活動の中で一番印象に残っている活動と、その理由を書き出してみよう。また、活動したことでの自分の変化を書き出してみよう。	
	
【質問３】地域協働活動を行ってきて、今どのような心境ですか。	
	
【質問４】今後、やってみたいことや頑張ってみたいこととその理由、今の意気込み（心境）を書き出してみよう。	
	

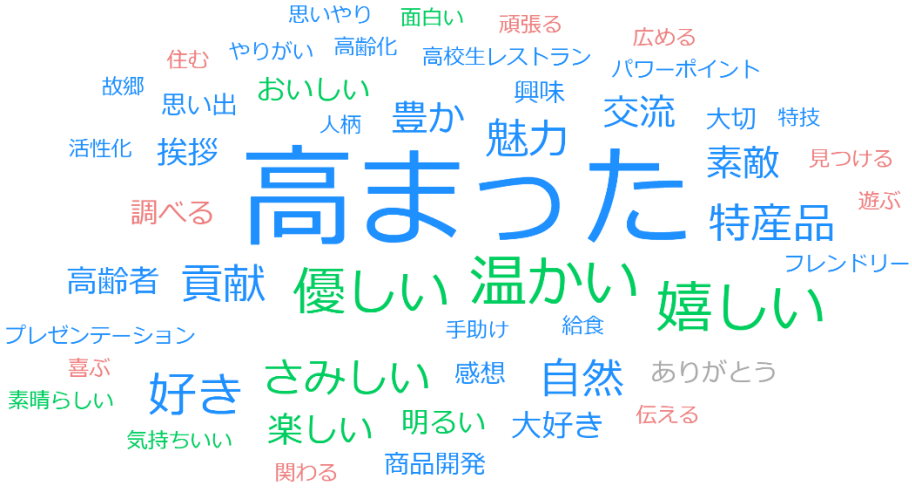
【質問５】佐用町に対しての地域協働前のイメージ　※3 学年（75 回生）のみ対象



【質問６】佐用町に対しての地域協働後のイメージ　※3 学年（75 回生）のみ対象



【質問７】佐用町に対しての愛着度は増しましたか？　※3 学年（75 回生）のみ対象



出典：User Local、AI テキストマイニング https://textmining.userlocal.jp/　（2023.3.08）

(6)外部講師からの評価

２学年「課題研究」において、食物分野では一年間通して外部講師との商品開発会議を行った。ここで協働していただいた外部講師に、生徒にどのような力が身についたと感じたかのアンケートを実施した。

【アンケート内容】

(1)一年間の活動を終えて、生徒に身についた・向上したと思う力を評価してください。

１　全く身についていない　２　身についていない　３　変わらない　４　身についた　５　とても身についた

①　自分で課題を見つけて解決方法を考える力（**課題発見・解決力**）

②　調理実習や焼き菓子製作など調理の技術（**調理技術**）

③　グループワークや外部講師、地域の方々との交流がスムーズにできる（**コミュニケーション能力**）

④　地域の現状や取り組んでいることに関して調査を行い、課題などを見つけ出す力（**調査・分析力**）

⑤　自分が地域にできることで地域と交流や貢献がしたいと思う気持ち（**ふるさと意識**）

⑥　困っている人や地域の課題解決のために役に立ちたいと思う（**ボランティア精神**）

⑦　地域と協働で活動する時に自分で計画を立てられる力（**企画力**）

⑧　自分が行った活動を地域の内外に知ってもらうように発信ができる力（**情報発信力**）

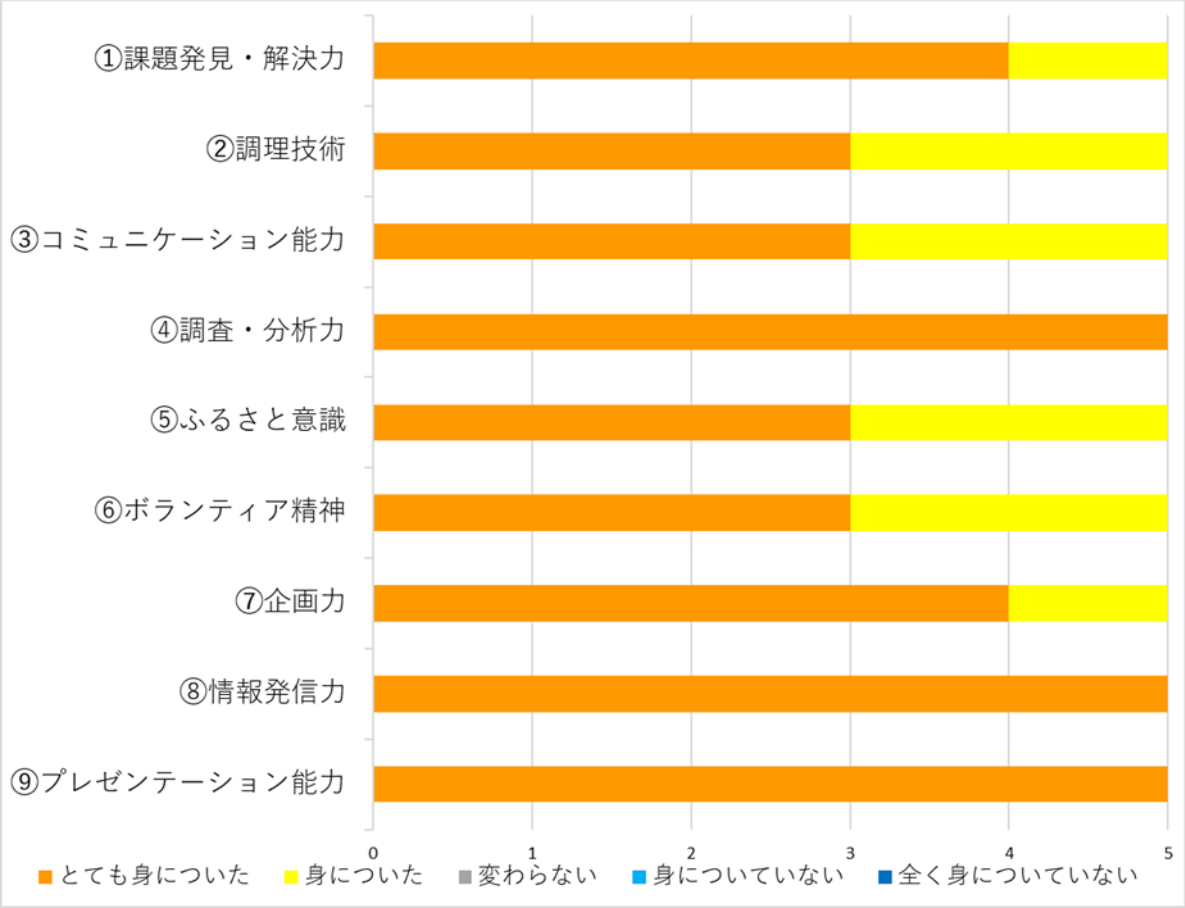
⑨　自分が行った活動を周囲に知ってもらうために説明できる力（**プレゼンテーション能力**）

(2) 一年間生徒と協働をしていただいての感想や生徒へのメッセージ（自由記述）

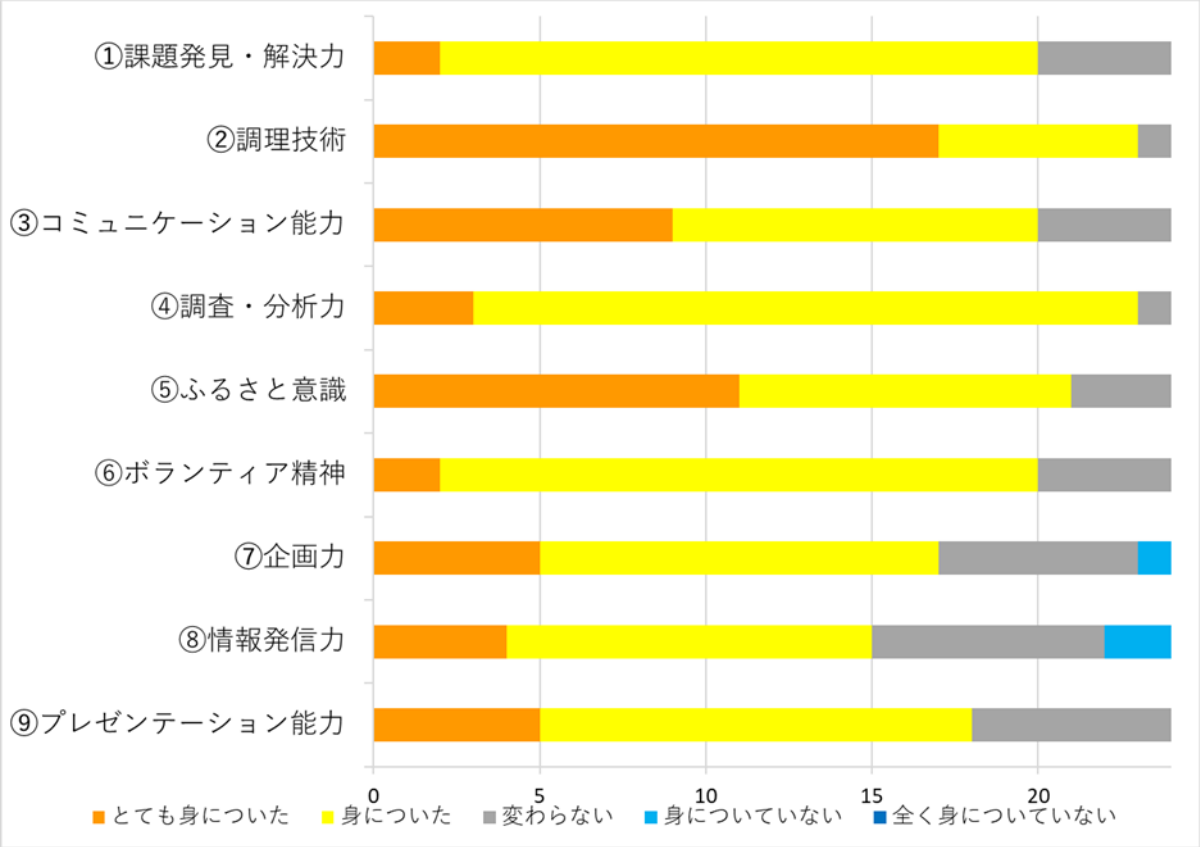
(3) 来年度に向けての提案や、こうしたらよいのでは、などの改善点（自由記述）

【身についた力に関する生徒の自己評価と外部講師による評価の比較】

外部講師による評価



生徒の自己評価（参考）



【外部講師からのコメント】

地域協働支援員

1　佐用高校の皆さんには、この度の地域協働事業の取り組み以外にも、色々と佐用町や地域住民とかかわりを持っていただいていることにお礼申し上げます。
地域協働活動においては、家政科生徒の皆さんの佐用町の特産品について理解をしようとする姿、それを活かした料理、商品開発に取り組む姿が真面目で真剣であることに感激しました。
姫音祭での接客体験、防災訓練での企画力、福祉のアンケート調査における高齢者とのコミュニケーション力等々、通常の授業では得られない社会経験ができたと思います。この自分らしさを出すという経験を生かして受験、就職活動において頑張ってください。
佐用町は、佐用高校の皆さんの頑張りをバックアップするとともに、生徒の皆さんと一緒に何かに取り組みたいと考えています。今後ともよろしくお願いします。

2　商品開発的な活動を実施した場合、購入者からのアンケートを入れて、その商品をリピーターとなって再度購入するかも調査してほしいと思いました。
コンソーシアム委員会での永田教授が言われていた他の学校の参考書となるよう、先生の活動、指導を活動のまとめに入れることは大切なことだと思いました。どんどんハードルが上がっているように感じますが、来年度もよろしくお願いします。

地域協働アドバイザー

1　生徒の皆さんは熱心に取組を続け、良い商品を開発したと思います。

2　商品として店頭に並ぶための仕組みを学び、開発商品の販売価格を決める取組もあったら良いのではと思います。

佐用町　農林振興課職員

1　生徒に特産物を紹介するにあたり、改めて町の農業について調べるいい機会になりました。今までこういった経験はなかったので、色々学びがある貴重な体験でした。

2　夢茜だけでなく、夢茜に加え町の特産物を使用したものを開発していただければと思います。

特産品生産業者

1　商品開発の難しさ、楽しさを体験してもらえたと思います。将来に役立ててもらえれば幸いです。

2　授業の内容（講義、実習など）を更に充実させ、スケジュールに落とし込みできればと思います。

佐用町　栄養士

1　コロナ禍の影響で、皆さんの高校生活の大半が、多くの方々と自由にコミュニケーションを取ることが難しい時期だったと思います。そのような中でも、地域の人を巻き込んで活動できたことや、商品開発の過程で学んだことは、実社会に出てから十分生かせる経験になったと思います。
一つの事を仕上げていくのは大変なことです。これはどんな事にも通じます。皆さんと一緒に取組めた一年間は、私にとってもとても良い勉強になりました。ありがとうございました。

2　本年度の学びを生かせるような事を、計画して継続出来れば良いと思います。

(7)カリキュラム開発専門家からの評価（研究発表会講評、コンソーシアム委員会抜粋）

兵庫教育大学　永田　智子　教授

・家庭科の目標は「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家族や地域の生活を創造する資質・能力を育成する」。実践的体験的な学習活動が家庭科で最も大切。高齢者訪問等の実践的な活動。先生に言われて行う体験だけでなく、生徒が企画して運営した実践的な活動が素晴らしかった。
・未来の多様性のために取り組んだ。昨年の発表の時の「地域の活性化は何か」「どういう風になったら活性化したと言えるか」という問いに答えを出した。地域の活性化とは様々な世代との関わりや繋がり。問題を発見しどう解決するかについて工夫してチャレンジ、評価したことが素晴らしい。
・「主体的に家族や地域の生活を想像する資質能力を育成する」は大切な目標。設定以上に到達した。
・当初に考えられたカリキュラムを着実に実施して生徒の成果が出た。昨年度までの様々な評価を総括的に評価して全体的なカリキュラムの見直しを行う必要がある。
・新規事業を来年度以降も行うことは素晴らしい。可能であれば各学科の専門性を高める内容だと良い。３つの学科が混じり合う部分の科目があると良い。「ＳＴＥＡＭ教育」はそれぞれの特性を活かして色々な人と協力する教育。家政科、農業科学科、普通科の特技を活かして佐用を良くすることを考えるプロジェクトだと面白い。色々な可能性があり、今後が期待できる。

島根大学　作野　広和　先生

・プレゼンテーションが非常に素晴らしい。プレゼンテーションが年々上手になっている。テーマを限定してスパイラルに深化している。３つのテーマで空間的にも徐々に広げて、深化が伝わる発表だった。
・地域課題の解決を通した地域への参画。１年目は提案や思考、２年目は実践、地域の方や行政と協働して行うことはよくあることで、３年目は地域課題を解決して取り組んでいた。地域そのものに参画している。
・今後の可能性、見通しを提示している。プレゼンテーションの最後の部分で、やりっぱなしで終らないことは評価できる。生徒自身が具体的に「佐用を笑顔に」と表明したことは非常に素晴らしい。真価が問われるのは卒業した後である。どの進路でも受け身ではなく、自分自身で判断して選択することが多いので、自身の成長に紐づけてより良い社会を築いていく主体になって欲しい。
・高校としてどう繋げていくかは高校が頑張れば良い方向に行く。ポイントは地域側がどう向き合っていくかである。防災の訓練も地域の参加が非常に少ない。地域はこれから衰退すると思われるので、児童生徒が地域を「補う」より、地域の一員として空いた部分を埋めていくことが学びにつながる。「地域型オン・ザ・ジョブ・トレーニング」をやっていく時代である。
・高校と地域を繋ぐコンソーシアムは双方にメリット。地域づくり協議会が高等教育の窓口になることが重要である。
・３年間の事業でも強く印象が残った。佐用町の運営そのものに携わる方向性が機能していく。
・佐用高校はこれだけ素晴らしいことをしているとアピールして、憧れる学校、地域にしていく必要がある。佐用から日本や世界を変えていくという心意気があれば必ず振り向いてくれる。佐用からオルタナティブな別の流れを作ることが大切である。

（３）指導に生かす評価の工夫～「指導と評価の一体化」に向けた取組～

ア　仮説

それぞれの事業の目標に合わせて作成した評価基準（ルーブリック）や客観的評価の仕組みを開発することで、到達目標を意識した成長を促すと共に、実践的で汎用性のある評価基準を確立する。

イ　活動実績

(1) ２学年「ヒューマンサービス」での給食サービス参画におけるルーブリックと自己評価
(2) 3学年「ヒューマンサービスⅡ」での高校生訪問サービスにおけるルーブリック評価
(3) 3学年「課題研究」における自己評価

ウ　実施効果とその評価

(1) ２年生「ヒューマンサービス」での給食サービス参画におけるルーブリックと自己評価

昨年度、生徒と共に作り上げたルーブリック評価表を用いて、給食サービスに参加した生徒を対象に自己評価を行わせた。本事業で終わるのではなく、自分の学びを振り返ることでPDCA サイクルを確立させることができ、より質の高い学習効果を得られた。改善点として、生徒が評価の記入がしづらい点が挙げられるので、〇などの記入欄を作るなどする。

(2) 3学年「ヒューマンサービスⅡ」での高校生訪問サービスにおけるルーブリック評価

昨年度考案のルーブリック評価表を基に実施予定であったが、観点に関して漠然としすぎている項目や、逆に具体的過ぎて評価しにくい項目があったため、適切な評価につなげるためには内容の見直しが必要と判断したため、今年度は評価を見送った。来年度に向けて、再検討中である。

(3) 3学年「課題研究」における自己評価

実習科目全般で共通して使用できるルーブリック評価表を作成した。課題研究で生徒に事前に配布し、評価内容を先に教えることで自分たちがどの部分を頑張ればどのように評価をしてもらえるか判断できるように工夫した。目標を明確にすることで、主体的な学びとモチベーション向上にもつながった。

(4)次年度以降以降に研究を実施していく項目

①発表を評価するルーブリック
②技術の習得を図る can-do リストを作成
③評価法も含めた授業の進め方や、教科におけるアクティブラーニングについて教員研修を実施
④生徒がポートフォリオ評価を行い、生徒の能力向上を自覚できるようにする。

2年　ヒューマンサービス　自己評価表	提出〆切：授業翌日

授業日：(　　)月(　　)日(　　)曜　　授業内（　　）

評価観点（　　）

【自己評価】

観点	グループ活動	レポート、資料作成
レベル５	詳しい意見が出て、話の内容が深まり、話がまとまった。自分も率先して班の意見をまとめることができた。	レベル４に加え、誰が見ても理解できる内容で、丁寧に記入してある。感想や反省だけでなく考察も書くことができた。
レベル４	話の内容が深いものになり意見をある程度まとめられた。自分の意見もたくさん言うことができた。	レベル３に加え、内容のまとめ方に工夫があった。文章も文脈を考えて書き、読みやすい。
レベル３	少し時間がかかったが意見をある程度まとめられた。自分の意見は言えた。	イラストや色を使って見やすくできた。 分からない漢字は調べて書いた。 空欄はない。
レベル２	話し合いはできているが意見をまとめるのに時間がかかった。自分の意見は言えた。	文字や色の工夫ができた。 文章はひらがなが多く、思いついたことをそのまま書いた。空欄が少しある。
レベル１	まとまらない意見ばかりで話し合いが進まなかった。自分の意見が言えなかった。	文字だけになった。 イラストがあっても空欄が多い。

「給食サービス」

観点	献立決め	調理	はがき・お品書き作成
レベル５	レベル４に加え、盛り付けや調理法にオリジナルのある献立ができた。	レベル４に加え、味付け、見た目、時間などに余裕をもって調理ができた。	文字やイラストを丁寧に書き、周りの手本となるはがきを書くことができた。
レベル４	レベル３に加え、季節や地産地消を考えた献立を立てることができた。	レベル３に加え、作業をグループで協力して進めることができた。	文字を丁寧に書き、自分で考えてイラストも記入した。
レベル３	栄養バランス、調理法、色どりに偏りなく考えることができた。	役割分担を行い、調理法も丁寧にし、味、盛り付けは計画通りの弁当ができた。	文字やイラストを丁寧に書いた。
レベル２	栄養バランスは考えられているが調理法、色どりに偏りがある。	調理手順を把握し、時間内に終わったが、味付けや見た目が悪くなった。	文字を書き、周りの人の作品を参考にイラストも書いた。
レベル１	栄養バランスや調理法、色どりが偏っている。	調理手順が決まっておらず時間内に終わらせられなかった。	文字だけ書いた。

【本時の評価】　　できた　　普通　　できなかった

・学習内容を理解できたか　　５　・　４　・　３　・　２　・　１

・授業に主体的に取り組めたか　　５　・　４　・　３　・　２　・　１

・準備、後片付けは率先してできたか　　５　・　４　・　３　・　２　・　１

【本時の感想と反省など】

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

【生徒の自己評価】

2年　ヒューマンサービス　自己評価表　　提出〆切：授業翌日

授業日：（ 5 ）月（ 6 ）日（ 金 ）曜　授業内容（ 献立決め ）
評価観点（ グループ活動 ）

【自己評価】

観点	グループ活動	レポート、資料作成
レベル5	詳しい意見が出て、話の内容が深まり、話がまとまった。自分も率先して班の意見をまとめることができた。	レベル4に加え、誰が見ても理解できる内容で、丁寧に記入してある。感想や反省だけでなく考察も書くことができた。
レベル4	話の内容が深いものになり意見をある程度まとめられた。自分の意見もたくさん言うことができた。	レベル3に加え、内容のまとめ方に工夫があった。文章も文脈を考えて書き、読みやすい。
レベル3	少し時間がかかったが意見をある程度まとめられた。自分の意見は言えた。	イラストや色を使って見やすくできた。 分からない漢字は調べて書いた。 空欄はない。
レベル2	話し合いはできているが意見をまとめるのに時間がかかった。自分の意見は言えた。	文字や色の工夫ができた。 文章はひらがなが多く、思いついたことをそのまま書いた。空欄が少しある。
レベル1	まとまらない意見ばかりで話し合いが進まなかった。自分の意見が言えなかった。	文字だけになった。 イラストがあっても空欄が多い。

「給食サービス」

観点	献立決め	調理	はがき・お品書き作成
レベル5	レベル4に加え、盛り付けや調理法にオリジナルのある献立ができた。	レベル4に加え、味付け、見た目、時間などに余裕をもって調理ができた。	文字やイラストを丁寧に書き、周りの手本となるはがきを書くことができた。
レベル4	レベル3に加え、季節や地産地消を考えた献立を立てることができた。	レベル3に加え、作業をグループで協力して進めることができた。	文字を丁寧に書き、自分で考えてイラストも記入した。
レベル3	栄養バランス、調理法、色どりに偏りなく考えることができた。	役割分担を行い、調理法も丁寧にし、味、盛り付けは計画通りの弁当ができた。	文字やイラストを丁寧に書いた。
レベル2	栄養バランスは考えられているが調理法、色どりに偏りがある。	調理手順を把握し、時間内に終わったが、味付けや見た目が悪くなった。	文字を書き、周りの人の作品を参考にイラストも書いた。
レベル1	栄養バランスや調理法、色どりが偏っている。	調理手順が決まっておらず時間内に終わらせられなかった。	文字だけ書いた。

【本時の評価】　できた　普通　できなかった

・学習内容を理解できたか　5 ・ (4) ・ 3 ・ 2 ・ 1
・授業に主体的に取り組めたか　5 ・ (4) ・ 3 ・ 2 ・ 1
・準備、後片付けは率先してできたか　5 ・ (4) ・ 3 ・ 2 ・ 1

【本時の感想と反省など】

班のみんなでいろいろな意見を出し合って、いい献立をつくることができてよかったです。お弁当を作るのに、サラダなどの野菜はゆでる、消毒するということを聞いて、へえ～と思いました。献立を考えるのは、むずかしくて、栄養バランスや、色どりなどを考えないといけないので大変だなと思いました。

3年　ヒューマンサービスⅡ　自己評価表	提出〆切：授業翌日

授業日：(　　)月(　　)日(　　)曜　　授業内（　　）

評価観点（　　）

【自己評価】

観点	グループ活動	レポート、資料作成
レベル５	詳しい意見が出て、話の内容が深まり、話がまとまった。自分も率先して班の意見をまとめることができた。	レベル４に加え、誰が見ても理解できる内容で、丁寧に記入してある。感想や反省だけでなく考察も書くことができた。
レベル４	話の内容が深いものになり意見をある程度まとめられた。自分の意見もたくさん言うことができた。	レベル３に加え、内容のまとめ方に工夫があった。文章も文脈を考えて書き、読みやすい。
レベル３	少し時間がかかったが意見をある程度まとめられた。自分の意見は言えた。	イラストや色を使って見やすくできた。 分からない漢字は調べて書いた。 空欄はない。
レベル２	話し合いはできているが意見をまとめるのに時間がかかった。自分の意見は言えた。	文字や色の工夫ができた。 文章はひらがなが多く、思いついたことをそのまま書いた。空欄が少しある。
レベル１	まとまらない意見ばかりで話し合いが進まなかった。自分の意見が言えなかった。	文字だけになった。 イラストがあっても空欄が多い。

「高校生訪問サービス」

観点	準備・計画	交流・実施	反省・引き継ぎ
レベル５	自分のアイデアを出し、周りに指示を出しながら動く事ができた。	レベル４に加え、積極的に自分たちで考えて行動ができた。臨機応変に対応できた。	レベル４に加え、訪問先の特徴を相手に理解してもらい、充実した引き継ぎを行った。
レベル４	自分のアイデアを出し、自ら率先して動く事ができた。	レベル３に加え、相手のことを考えて会話ができた。決めていた内容がスムーズに進んだ。	レベル３に加え、具体的な改善策を挙げ、訪問話し合いができた。訪問先の特徴が伝えられた。
レベル３	必要な準備を考えて自分から動く事ができた。	スムーズに会話をし、コミュニケーションが取れた。笑顔を心掛け、会話が弾んだ。	反省点について改善策を挙げることができた。訪問先の話ができた。
レベル２	人に言われてから行動した。	挨拶はできたが、うまく話せない。自分で考えて行動できない。	反省点はあるが、改善策がわからない。内容が相手に伝えられない。
レベル１	自分から行動できない。	表情がかたく、うまく話せない。計画していたことができていない。	反省・改善点がわからない。内容を相手に伝えられない。

【本時の評価】　　できた　　普通　　できなかった

- 学習内容を理解できたか　　５・４・３・２・１
- 授業に主体的に取り組めたか　　５・４・３・２・１
- 準備、後片付けは率先してできたか　　５・４・３・２・１

【本時の感想と反省など】

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

【実技科目に共通して使用できるルーブリック評価表】

評価		4	3	2	1
各種レポート	まとめ	３に加えて、まとめ方に創意工夫（図式化、グラフ化、レイアウトの工夫 etc）が見られる。	講義・実習内容や参考資料をわかりやすくするため工夫してまとめている。（箇条書きやイラスト、キーワードの強調 etc）	講義・実習内容や参考資料をそのまま写してまとめている。もしくは、課題の条件を満たしていないものがある。	講義・実習内容の全てをまとめられていない。もしくは、課題の条件（着色・余白なし etc）を複数満たしていない。
	感想	３に加えて感想が客観的・論理的に述べられている。	２に加えて感想に具体性があり、内容を自分事と捉えている。	感想を最後まで書いている。講義・実習内容だけまとめている。	感想が最後まで書かれていない。もしくは、最後まで書いているが内容が薄い。
作品・発表		３に加えて、表現方法に複数の独自のアイデアを盛り込み、創意工夫が見られる。	事前に提示された条件を満たしており、指示されたことだけでなく、アイデアや分かりやすい工夫が盛り込まれている。	事前に提示された条件満たしている、もしくは条件を満たしていないものがあるが、指示通りのものができた。	事前に提示された条件（複数）を満たさず、指示通りのものができていない。
実習態度		授業に出席し、３に加えて、周囲に指示を出しながら、リーダーシップを取って活動できる。	授業に出席し、指示通り活動に取り組むだけでなく、自らアイデアを出し、活動できる。	授業に出席し、指示通り活動に取り組んだ。	授業に出席しているが、指示どおり活動に取り組まない。

３　委員会等実施報告

（１）コンソーシアム委員会実施報告書

【第１回コンソーシアム委員会】

１　日　時　　令和４年５月２６日（木）１４：００～１５：３０
２　場　所　　兵庫県立佐用高等学校　会議室
３　出席者
（１）コンソーシアム委員
　　庵逧　典章氏（佐用町長）
　　藤本　正文氏（佐用町自治会連合会長）
　　西川　典男氏（佐用町教育委員会教育課　教育推進室長）
　　田和　久典氏（IDEC 株式会社　新規事業開発部 LLP 事業推進グループマネージャー）
　　水野　博氏（日本調理製菓専門学校　校長）
　　水沼　憲二氏（美作市スポーツ医療看護専門学校）
　　久保　正彦氏（一般社団法人　ドローン減災士協会　代表理事）
　　武田　由哉氏（兵庫県立山崎高等学校　校長）
　　神田　貴司氏（兵庫県教育委員会高校教育課　主任指導主事）
　　永田　智子氏（兵庫教育大学　教授）※リモート参加
　　作野　広和氏（島根大学　教育学部教授）※リモート参加
（２）佐用町　地域協働学習支援員　服部 憲靖氏（佐用町企画防災課）
（３）佐用高等学校　西坂　美樹（校長）、上田　貴哉（教頭）、岩﨑 由香子（教諭）、
　　小寺　由夏（教諭）、本江　陽奈（教諭）、松本　奈実（教諭）、
　　多々良　理奈（教諭）、高橋　智美（臨時講師）、中田　真佑（臨時実習助手）
４　次　第
（１）資料確認
（２）開会
　①　開会のことば
　②－１　校長挨拶（佐用高校　西坂校長）
・世の中の動きを復活させる方向である。厳しい環境の中で地域の皆様の支援や協力を得て、３本柱の取組に工夫を凝らして精一杯取り組んできた。特に昨年度の取組はコンソーシアムの皆様全員の協力で充実した活動となった。
・今年は集大成なので地域に還元するための生活改善の実践で発展活動に取り組みたい。
　②－２　委員代表挨拶（佐用町　庵逧町長）
・地域との協働事業による高等学校教育改革推進事業は、計画していた活動ができない中で、専門学校での実習や指導を受ける等の工夫をして、実践と研究を積み重ねた。
・家政科の生徒が実践を通して経験し、自信と誇りを持って身につけていくことが大切である。

研究活動の実践で生徒に大きな力がついた。佐用高校で学び、社会に出て、自分の家庭で健康に長生きすることに役立つのが１番の成果である。

（３）出席者紹介

（４）司会選出

（５）議事

① 令和３年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」研究開発事業報告について

② 令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」研究開発事業計画について

③ 意見交換

水野氏（みかしほ）

・昨年度は保存食と缶詰や災害時に簡単にできるメニュー開発をした。今年度は食生活改善レシピを考えたいと相談があった。特に高齢者に対する指導をしたい。

・食生活改善のレシピ本を作る時に、お年寄りの人が誤嚥しにくい、噛みやすく食べやすいもの、味つけポイントがある。和食や野菜と魚ばかりでなく、洋食でごちそう的な物も必要である。

・高校生が一生懸命なことはみかしほの学生にとっても刺激になる。

水沼氏（美作スポ）

・健康寿命延伸に向けた学びに関わっている。福祉分野は具体的にどういう資格でどんな仕事に繋がるか、高校生に伝えるのが難しい。高校生の時から連携事業を通して、福祉の業界を知ってもらえる工夫をしたい。

久保氏（ドローン）

・昨年イーグレ姫路での姫音祭と防災訓練に参加させてもらった。姫音祭で生徒達が自発的にチラシを配ったことは、コミュニケーション能力が高い。

・防災訓練はドローン減災士協会、兵庫県立大学の木村教授や木村研究室の学生に防災訓練のやり方や防災について知識をもらった。大学生にも影響を与えた。

・事業を続けることで生徒たちが成長している。先生方が献身的に取組をされていることにお礼申し上げたい。

武田氏（山崎高校）

・今年度の計画書にもある高齢者や保育園等を含めて、地域の人と人との繋がりの中で協働をしていくベースはコミュニケーションである。生徒たちは力をつけている。より一層深くコミュニケーションができると、より良い協働となる。

・高齢者や地域という言葉は一組に考えてしまう。様々な高齢者や住民がいる。地域は多様性がある集団なので、コミュニケーションを通して多様性をより深く理解すると事業がより深まる。

神田氏（県教委）

・今年度で事業は終わりだが、持続可能な体制の構築をお願いした。

・色々な改善点があるが PDCA サイクルを回して、資質の向上でより良いものを作ってほしい。

・指導と評価の一体化が大切である。指導したものと評価したものがバラバラでは生徒に還元できず、より良い授業ができない。学校で知識がない部分はカリキュラム専門家の先生方にご協

力いただき、事業が終わっても宝物になるような指導と評価の一体化を作っていってもらいたい。

田和氏（IDEC）

・特産品を使った商品開発で参加している。高校生が商品開発をするにあたり物を作るだけではなく、費用や買う人をイメージしてマーケティングができるように、専門的なところも授業したい。

・特産品は過去２年間実際に商品を作っている人達との交流ができなかった。今年は実際にどういう気持ちで商品を作っているかを見てもらい、商品に対する思い入れも感じて欲しい。

藤本氏（自治会）

・初めて会議に参加した。私たちの学生時代と全然違う。嫌々行っているのではなく、先生方の努力で成功したのではないか。様々な生徒がいる中で感謝している。

庵逧氏（町長）

・佐用高校家政科の特色ある教育は、人間が生きる基本的な能力を学べる。

・家政科だけでなく、農業科学科や普通科にも広げて取り組むことが学校の柱である。人間が生きる力のために衣食住の基本的な知識を持つと大きい。

・家庭で子どもの頃から食生活を学ぶことも大切だが、社会に出ると学ぶ機会は少ない。佐用高校で学ぶという大きな役割を持って欲しい。

④　指導助言

永田氏（兵教大）

・昨年度の報告書は大変素晴らしい。PDCA で様々な科目を設定して、多様な活動を実現している。コロナ禍だが先生方や生徒が非常に頑張った。どこの学校でも PD は頑張るが CA が不十分になりがちだが、佐用高校は C もしっかりとしている。生徒へのアンケート等のポートフォリオが証拠として残してあり、それを様々な分析ができているのも良い。

・テキストマイニングで量的な分析を記述に利用。最初は「不安」だが「高齢者訪問」「防災訓練」「コミュニケーション」等の活動を通して「嬉しい」や「良い」と感じて、来年度の様々な頑張りたいことが分かりやすく表現されていて良い。更に本年度の取組を改善に活かそうとしているのが素晴らしい。

・教員の指導の PDCA が面白い。生徒の活動も PDCA で合わせている。教員は待つ、見守る、褒める、期待する。教え込むのではなくて、生徒が主体的に学ぶことを促進するファシリテーションの役割。総合的な探究の時間にも通じる。主体的に学ぶために必要な技法を取り入れている独自の表現で良い。

・家政科は家政に関する科目がたくさんあるので、個人の３年間の取組を表現する場があっても面白い。家政科の学びで私は３年間でこんな資質能力がついたと過去のポートフォリオを集めて、私はこんなふうに成長したと発表する場も良い。

作野氏（島根大）

・佐用高校の取組は素晴らしい。１年目から２年目、３年目で研究授業を深化させるだけでなく、生徒の学び、カリキュラムの深化、学校自体の成長に繋げている事は高く評価できる。

・活動だけでなく学びもあり、生徒自身の育ちに繋がっていると評価指標を用いて具体的に客観

的に表せることは研究開発で重要である。

・今までの総合的な探究の時間は、教師側が良い意味で待ったり、見守ったり、手を出したり、先生が誘導しないことが良かった。最近は同じ視線、同じ未来を見つめることが求められる。

・教科と領域の設定と改善、教科間、学科間の連携やカリキュラムマネジメントをやっていく。先生方は最初のハードルを越えると楽しくできる。探究や学校設定科目のものと各教科が結ばれることで、教科教育自体も充実すると意識できて学校の研究開発の意義に繋がる。

・気になる点は、地域との関係で従属的な表現が多く見られたこと。生徒にとっては学校教育の一環であり、地域に向き合うからといってボランティアではない。地域の胸を借りて学ぶ結果で地域と共に切磋琢磨して成長する。社会を拓いて築いていく人材を主体的に育成して欲しい。

・佐用高校が地域にとって不可欠な存在になると、コンソーシアムでは最初から意図的に組み込んでいる。「コミュニティ・スクール」は学校から見て地域とともに歩む学校となるように地域と連携することである。地域側も「スクール・コミュニティ」として、佐用高校がなくてはならない存在として位置づけることが必要である。

令和3年度　研究開発事業報告

1．評価できる点

1）モデル事業3年間の進化・深化・真価　1年→2年→3年
2）「活動」→「学び」→「育ち」につながっている（評価指標より）
3）多様な教科・領域（学校設定科目）の組み込み

2．検討要素

1）指導方法：P→D→C→A・・・教員が安全地帯にいないか？
「待つ」「見守る」「褒める」「期待する」
◎生徒と教師が同じ視線，同じ「未来」を見る
P「共に考える」，D「共に行動する」，C「共に喜ぶ」
A「共に未来を築く」
2）「佐用学」を小学校，中学校においても構築して頂きたい

1

令和4年度　研究開発事業計画

1．評価できる点

1）指導と評価の一体化：ルーブリック等の見える化の模索
2）教科・領域（学校設定科目）の設定・改善
3）教科間・学科間の連携，カリキュラムマネジメント

2．検討して頂きたい点

1）気になる従属的な表現：「ボランティア」「貢献」
→社会を拓き，築く人材を主体的に育成して欲しい
2）「地域から学ぶ」→「地域と学ぶ」→「地域を拓く」
3）佐用高校が地域に不可欠な存在になることを意図する
コミュニティ・スクール：学校→地域（とともに歩む学校）
スクール・コミュニティ：地域→学校（が不可欠な存在）

2

【第２回コンソーシアム委員会】

１　日　時　　令和４年１０月１８日（火）１３：００～１４：３０
２　場　所　　兵庫県立佐用高等学校　会議室
３　出席者
（１）コンソーシアム委員
　　庵逧 典章氏（佐用町長）
　　藤本　正文氏（佐用町自治会連合会長）
　　西川　典男氏（佐用町教育委員会教育課　教育推進室長）
　　田和　久典氏（IDEC 株式会社　新規事業開発部 LLP 事業推進グループマネージャー）
　　水野　博氏（日本調理製菓専門学校　校長）
　　加藤　丈晴氏（美作市スポーツ医療看護専門学校）
　　久保　正彦氏（一般社団法人　ドローン減災士協会　代表理事）
　　武田　由哉氏（兵庫県立山崎高等学校　校長）
　　神田　貴司氏（兵庫県教育委員会高校教育課　主任指導主事）
　　永田　智子氏（兵庫教育大学　教授）※リモート参加
　　作野　広和氏（島根大学　教育学部教授）※リモート参加
（２）佐用町　地域協働学習支援員　服部　憲靖氏（佐用町企画防災課）
（３）佐用高等学校　西坂　美樹（校長）、上田　貴哉（教頭）、岩﨑　由香子（教諭）、
　　小寺　由夏（教諭）、本江　陽奈（教諭）、松本　奈実（教諭）、
　　多々良　理奈（教諭）、高橋　智美（臨時講師）、中田　真佑（臨時実習助手）
４　次　第
（１）資料確認
（２）開会
　①　開会のことば
　②－１　校長（佐用高校　西坂校長）
・産業教育フェア青森大会という全国での発表が１０月１４日（土）に行われた。文部科学省の担当室長や調査官などの前で２年半の取組を発表し、高評価を得た。
・３本柱のそれぞれで工夫を加えながらバージョンアップし、実践活動を積み重ねている。
　②－２　委員代表挨拶（佐用町　庵逧町長）
・文科省の指定も最終年度３年目に入り残り僅かだが、１月に開催される成果発表が楽しみ。
・地域協働で様々な経験と実績を積み、社会や進学先で学んで佐用町への貢献を期待している。
（３）出席者紹介
（４）司会選出
（５）議事
　①　令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
　　（プロフェッショナル型）」研究開発事業進捗状況について
　②　意見交換

水野氏（みかしほ）

・３年生フードデザインはカフェを開催するということで、サービスする方と受ける方で不足部分や気付く部分を考えられるように体験できていた。ポップ作りも高校生に任せると面白いものができた。

・２年生フードデザインは大量調理を実施した。学校の大量調理室で毎日３００食の給食を作っている。高齢者は薬で口の中が荒れている場合があるため、カツではなくて天ぷらにするなどのノウハウも伝えた。

・３年生ヒューマンサービスⅡでは食改善レシピ本を作成するということで、普通食を高齢者の方が一緒に食べられるような介護食にするために、味付けや切り方、盛り付け方などのアレンジを行う講義を行った。

・２年生フードデザインは災害食を検討していると伺った。災害が起きた時、最初は缶詰などの備蓄食を食べる。缶詰は長期保存できるが、加熱（殺菌）時間が非常に長く、食品の変化が非常に激しい。その条件で美味しいものを作るアレンジがポイントである。

加藤氏（美作スポ）

・初めて会議に参加したが、プレゼンで感動した。素晴らしい取組と先生方の努力で成果が出ていることに感動した。プロジェクトの一部を担うとともに専門学校に持ち帰って成長し、貢献できるように努力したい。

武田氏（山崎高校）

・３年間を通して実施したアンケートの結果を見て、地域とどれだけ生身で接したかが結果に表れている。地域と接した度合いの高さが佐用町の魅力などに表れている。

・コロナ禍でリモートやバーチャルで十分という意識も芽生えたが、実際にその場所に行ったり、人と出会ったり、匂いを嗅いだり、食べたりという様々な感覚に基づいて感じることが大切である。

・これまで家政科の生徒達がやってきたことを普通科の生徒たちにもインスパイアする。佐用高校全体としての取組にすることが大切である。

神田氏（県教委）

・３年間で終わるのではなく４年目をどうするかが課題である。残された６か月で自走していくための繋がりを更に太くできれば良い。

・アンケート結果は良いデータが出ている。佐用町で学んだことを自分の地元でも活かすような取組ができれば更に広がる。佐用高校で学んだことを自分の住んでいる場所で、主体的な市民または町民として頑張ってもらえれば面白い。

田和氏（IDEC）

・素晴らしいプレゼンに感動した。地域協働に最初から参加し、商品開発をする時の苦労や様々なノウハウの一端を感じていただければと思っていた。ラベルを張るのに１ミリもずれないように貼ることを注意したと、そこまで思っていただき嬉しい。

・３年間で生徒のコミュニケーション能力ではなく、自主性が高まっている。取組へ前向きに積極的に向かう姿勢は、社会的に出ても全ての源となる。自主性は気持ちがなければ何も進まない。生徒の自主性の成長を感じた。

藤本氏（自治会）

・佐用高校の卒業生だが、当時はこういった取組はなく、進歩している。先生方の指導の賜物である。

久保氏（ドローン）

・佐用高校に関わって５年目になる。堂々とした発表を見て、自分も達成感を得た。
・地域や人と企業が学校と生徒と関わって素晴らしい人ができる。地域が学校を育て、地域が人を育てる。先生方も成長されたのではないか。
・魅力ある佐用高校ができることで、人も集まる。そこで関わった企業に就職したいという生徒も出てくる。ぜひこの仕組みを続けることを前提にアクションを起こして欲しい。

庵逧氏（町長）

・発表の中で、佐用高校が地域になくてはならない高校として、町を笑顔にしたいという言葉があったのは嬉しい。結果がアンケートにも数字として表れている。県教委自体が主体になって地域の人材を育てて欲しい。
・３年間の佐用高校で学んできた経験を活かして、町外から来ている生徒も地域のために頑張ろうという気持ちや、佐用町が好きだという生徒が育てば素晴らしい。

③　指導助言

永田氏（兵教大）

・充実した発表に感動した。商品開発や実践した取組や発表内容は、他校にない充実した内容である。生徒はもちろん先生方の努力、関係されている企業や学校の先生方のご協力に敬服する。
・随時アンケートを取って他の学科と比較し、最終的には経年比較をしてほしい。家政科の生徒の伸びを量的に示せば他の方も納得するのではないか。
・３年生が３年間を振り返った集大成のポートフォリオを作って提示してみてはどうか。取組ごとの感想やワークシート、先生方自身の記録を含めて３年間を振り返るとよい。最終的な学びの成果をまとめる作業は、３年間のカリキュラムの成果によって生徒にどんな資質能力がついたのか読み取ることができる。
・生徒自身も、「最初は全然できなかったが、どんどん成長した」という３年間の学びから自信を持つことができる。大学や社会人になるにあたり、自信を持てる要素となる。「次はこんな課題を持ってチャレンジしたい」という自信に繋がる。先生方はそれぞれの科目の見直し、あるいは科目の配置の見直しの参考になる。

作野氏（島根大）

・学校の取組の評価は大変素晴らしい。特に１年生から３年生にかけて体験的に地域を対象とした学習ができたことが評価できる。
・生徒の主体性（自立、自律）を達成した。先生方が促されていることを強く感じた。
・生徒の発表の中でルーブリックという言葉があり、評価の観点をされたのだと思う。
・検討点は評価の数値目標の多様化していることである。対象を生徒だけでなく、家政科担当の教員以外の教員や行政、地域の人々の評価も聞くと、地域と一層の一体化をする。また、事業終了後における推進体制が確立していることも良い。
・佐用高校は生徒に対するアンケート以外にも入学者数を増やすことや、卒業時の進路の実現、

コンソーシアムが適切に機能していたか評価することが必要である。評価することで学校と学校を支える地域の両方向に認識を新たにするメリットがある。

・佐用町では立派な総合計画があって素晴らしい。佐用高校の生徒、佐用高校自体が実在する一役を担うストーリーを描くと、地域において佐用高校がなくてはならないものだという必然性を提示できる。県教委も一緒になって来年以降の体制を検討していただければと思う。

令和4年度　地域との協働による高等学校教育改革推進事業

1．成果

1）1年生から3年生にかけて体系的に地域を対象とした学習ができた
2）生徒の主体性（自立・自律）を促した
3）評価の観点から改善された（例：ルーブリックの作成）
4）発表の機会が得られたことにより，学習成果の発信が果たされた

コンソーシアム等の助言に対して忠実に対応して頂いた成果
（先生方の真摯な姿勢→子どもたちが背中を見て育っている）

2．検討して頂きたい点

1）評価→数値目標（多様な評価指標：生徒＋教員＋行政＋地域・・・・）
2）地域との一層の一体化：社会を拓き，築く人材を主体的に育成して欲しい
地域側の課題：佐用町の「総合計画」実施の一部を担う
3）事業終了後における推進体制の確立

1

【第３回コンソーシアム委員会】

１　日　時　　令和５年１月２２日（日）１１：００～１２：００
２　場　所　　さよう文化情報センター　会議室
３　出席者
（１）コンソーシアム委員
　　庵逧　典章氏（佐用町長）
　　西川　典男氏（佐用町教育委員会教育課　教育推進室長）
　　田和　久典氏（IDEC 株式会社　新規事業開発部 LLP 事業推進グループマネージャー）
　　水野　博氏（日本調理製菓専門学校　校長）
　　久保　正彦氏（一般社団法人　ドローン減災士協会　代表理事）
　　武田　由哉氏（兵庫県立山崎高等学校　校長）
　　清水　道子氏（兵庫県教育委員会高校教育課　副課長）
　　永田　智子氏（兵庫教育大学　教授）
　　作野　広和氏（島根大学　教育学部教授）※リモート参加
（２）佐用町　地域協働学習支援員　服部　憲靖氏（佐用町企画防災課）
（３）佐用高等学校　西坂　美樹（校長）、上田　貴哉（教頭）、岩﨑　由香子（教諭）、
　　本江　陽奈（教諭）、高橋　智美（臨時講師）、中田　真佑（臨時実習助手）
４　次　第
（１）資料確認
（２）開会
　①　開会のことば
　②－１　校長（佐用高校　西坂校長）
・３年間の感謝を申し上げたい。委員の皆様の協力がなければ、研究発表が出来なかった。
・佐用町を笑顔にできたことが成果であるが、本当の成果は生徒の成長した姿である。生徒が力を付け、生徒の立派な姿を見てもらえる発表会となった。
・来年度は佐用町からの支援で農業科学科と普通科を巻き込み、佐用町との協働に取り組みたい。
　②－２　委員代表挨拶（佐用町　庵逧町長）
・課題目標を持って成果発表ができて嬉しい。生徒が落ち着いて発表できたのが成果である。卒業して社会に出ても大きな力となった。
・佐用高校の役割や期待は今後も変わらない。地域の期待を持って、地域課題を前向きに捉えて社会に出る人材を育ててほしい。３年で事業は終わるが、地域課題は引き続くので、実践を通した体験に取り組んで欲しい。教科書だけで教育はできない。
（３）出席者紹介
（４）司会選出
（５）議事
　①　全国サミットでの事業報告（カリキュラム開発の視点での事業報告）
　②　各取組での生徒の感想やアンケート結果について

③　令和５年度　新事業計画について

④　意見交換

水野氏（みかしほ）

・素晴らしい発表であった。

・高校生レストランは献立がもちろんだが、レストランの接客やポップが大切と講義した。サービスを受けた時に、自分がどういうサービスをしたら１番良いかを探すことも大切である。

・これからの時代はＳＤＧｓが必要である。できるだけ少ないエネルギーの中で効率よく栄養価の高いものを考えることが防災食に繋がる。次の年にステップアップしてほしい。

武田氏（山崎高校）

・立派な発表で大変素晴らしい。３年間コンソーシアムに参加して、年々取組が充実して見えた。

・佐用町外から佐用高校に通学し、佐用町と関わりを持ち始めた生徒が地元の人と接することで、地域を理解し、地域に愛着を持って取組が出来るようになった。

・事業を継続してもっとブラッシュアップして地域の発展に高校生が寄与できる事業になればよい。陰ながら応援。大変素晴らしい３年間であった。

清水氏（県教委）

・先日の文科省の発表でも、佐用高校の発表は研究としてきれいにまとまっていた。佐用町の協力があったからできた。これほど町と高校の関係が良い地域は他にない。

・県立高校では教育改革第３次計画で発展的統合等の課題を解決していく改革を進めている。地域での高校の役割を再認識しながら、地域とどう付き合うのか学校自身が考えて地域に役立つ人材を育成できるような学校を作っていかなければならない。佐用町と佐用高校の関係は他の地域の見本になる。

・生徒は「自分がこんなことができるようになった」ということを人と話しながら実感できる。自己有用感を数で示すような分析ツールは、自分が目に見える形で成長できたことが見え、「ここが私の強み」ということが自己アピールできる力になる。

田和氏（IDEC）

・生徒の学ぶ機会で協力させてもらい、社員も学ぶことが非常に多い３年間だった。

・特に印象に残ったのは、パネル展示の前で生徒と話をした時で、自分が行ったからこそ質問に答えられるのだと思った。力が身についた何よりの証に思う。

・今後の課題はスープやカレー等の開発した物がどこでも買える環境が整っていない。作った物をこのまま終わりにするのではなく、どこかで買える形にすれば、地域活性化に繋がっていくのではないか。

久保氏（ドローン）

・最初からこの事業に関わり、生徒の成長を目の当たりにした。素晴らしいし、嬉しい。

・詰め込む教育では得られない経験で佐用高校の特色になっている。関係する皆さんがスパイラル的に成長し、それを見て気付きを与えて次の事業に取り組めた。

・生徒たちが佐用町で仕事ができるフィールドを整えるのが課題となる。知恵を出し合いながら更に前に進めていくようなことができればと思う。

庵逧様（町長）

・県立高校だが地域の学校として一緒に協力して欲しい。

・教育環境を整えて勉強できるようにして欲しい。１番大切なのは責任教育の在り方で、地域それぞれが課題を持っている。学校にとって特色がそれぞれ違うので、そこに合わせたものが出来ない歯がゆさがある。

⑤　指導助言

永田氏（兵教大）

・カリキュラムが完成年度であった。当初に考えられたカリキュラムを着実に実施して生徒の成果が出た。昨年度までの様々な評価を総括的に評価して全体的なカリキュラムの見直しを行う必要がある。持続可能にするために、やりすぎている所や足りない所を見直すべき。全体のカリキュラムの見直しを最後にすると良い。

・生徒への評価に関して、学びの成果は様々な所で見える。今後の人生に繋がっているのか、継続的に卒業生に調査すると面白い。進路にどのように今回の学びが影響したのか、あるいは人生にどう影響しているのか調査すると、今回のカリキュラムがどう人生に影響されたのかも分かって素晴らしい取組となる。

・新規事業を来年度以降も行うことは素晴らしい。可能であれば各学科の専門性を高める内容だと良い。最終で良いが３つの学科が混じり合う部分の科目があると良い。「ＳＴＥＡＭ教育」はそれぞれの特性を活かして色々な人と協力する教育である。家政科、農業科学科、普通科の特技を活かして佐用を良くすることを考えるプロジェクトだと面白い。

作野氏（島根大）

・３年間でかなりの成果が出た。

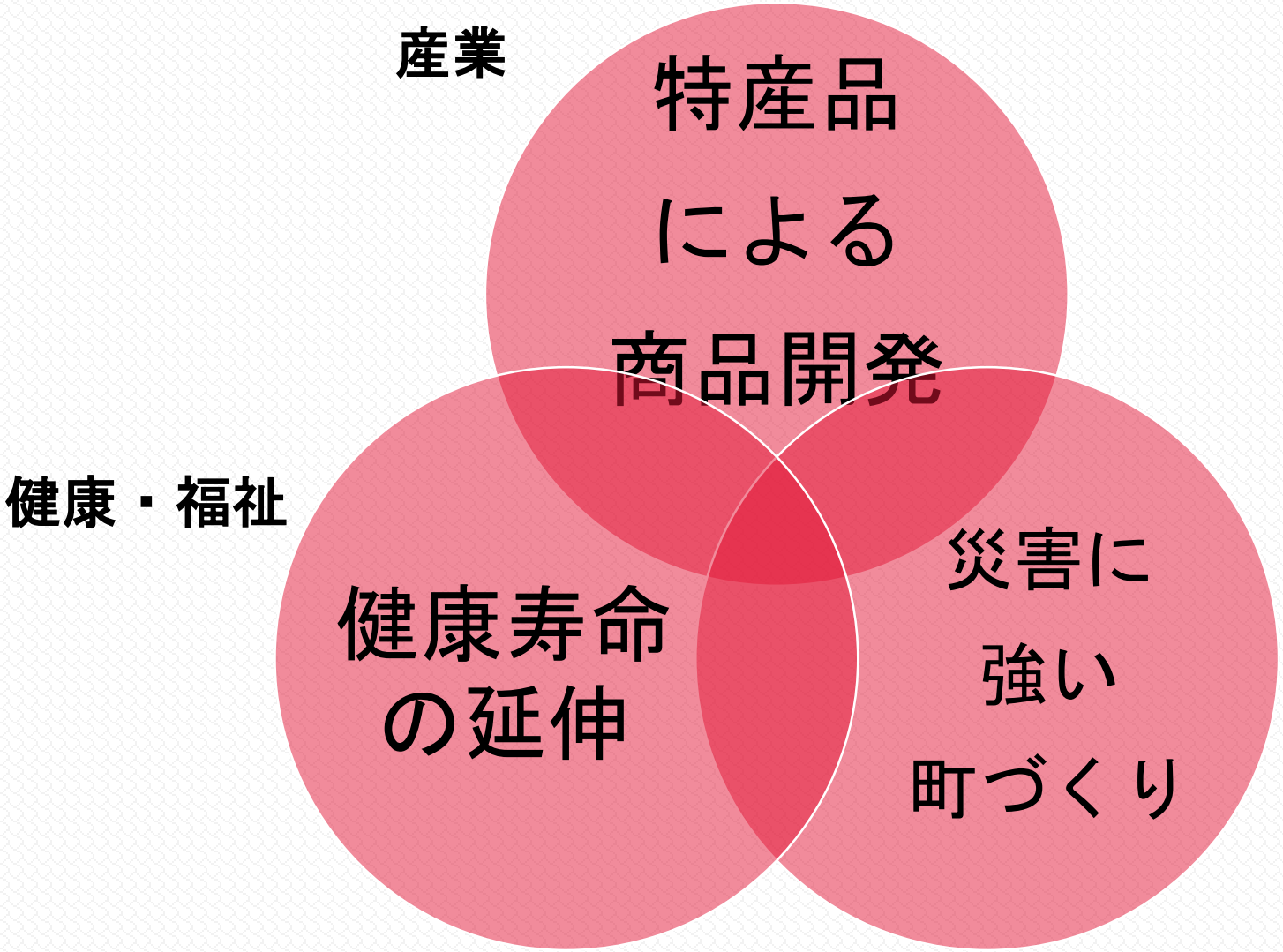
・高校としてどう繋げていくかは高校が頑張れば良い方向に行く。ポイントは地域側がどう向き合っていくかである。防災の訓練も地域の参加が非常に少ない。地域からは学校にお付き合いしているという感覚に見える。地域はこれから衰退する。児童生徒が地域を「補う」より、地域の一員として空いた部分を埋めていくことが学びとなる。「地域型オン・ザ・ジョブ・トレーニング」をやっていく時代である。

・どう自走モードにしていくかが大切で、参考は山口県の地域連携教育である。高校教育そのものを学校運営だけではなくて、テーマ型のコミュニティスクールにするべきである。テーマ単位だと地域は関わりやすい。子どものためにやってあげるのではなく、地域のためでもある。地域のために考えることが結果として、高校教育に資する。佐用町では可能だと思う。

・佐用町には安全で快適な暮らしを作るきらめきのまちづくりという、具体的な計画がある。高校がやっている授業がコミットするだけでなく、一部を担っていくと良い。お互いがプラスαでやるのではなく、やらなければならないことを頑張る構造にすべきである。

・佐用高校はこれだけ素晴らしいことをしているとアピールして、憧れる学校、地域にしていくと良い。佐用から日本や世界を変えていくという心意気があれば必ず振り向いてくれる。佐用からオルタナティブな別の流れを作ることが大切である。

協働事業のスキーム



佐用町の施策に
反映

地域の持続に
寄与

佐用高校の
存在意義

成果

①充実したプレゼンテーション

○聞き手に伝えようとする意思がわかる発表

○わかりやすいパワーポイント資料：文字の大きさ，写真，図表

②テーマを限定してスパイラルに深化（完成年度）

○３年間の集大成（充実）

○系統（３大テーマ），時間，空間，

③意思を持った学びと３年間の成長

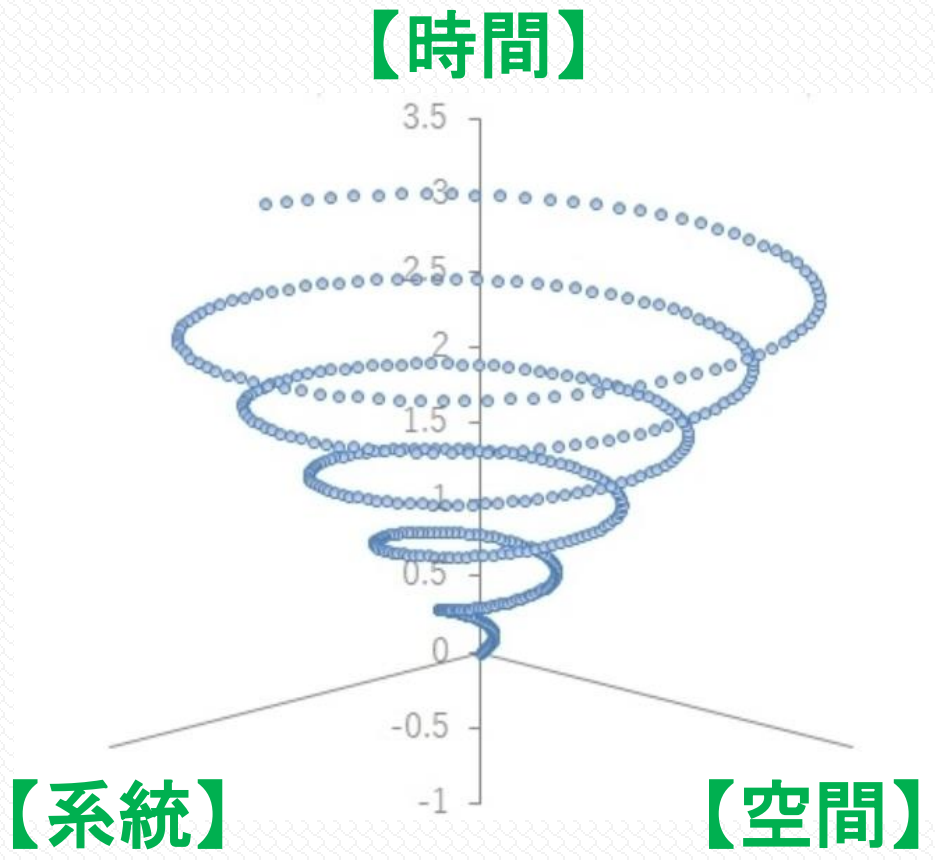
○「やらされた感」→「使命感」

④地域課題の解決を通した地域への参画

○提案・試行→実践・協働→参画・先導

⑤今後の可能性，見通しを提示

○生徒自身，学校，地域がどうあるべきかを提示　→「佐用を笑顔に」



今後の課題

（１）真価が問われる卒業後の「生き方」

・高校を卒業したら学習は終わりなのか？

・高校で学んだことは，今後の人生に役立たないのか？

↓

・自身の生活，学び（高等教育機関等），仕事に活かす

・受け身ではなく，自身が主体的に活動していく

↓

異なる環境における主体的な実践→「自走モード」

今後の課題

（２）高校としてどう進化するか？

令和２・３・４年度

高校生としての立場で
「できること」を実践する

生徒のみなさんが
企画するとよい

卒業後の関わり

令和９・10・11年度

佐用高校（生徒）が地域の
役割を担う
↓
佐用高校がなくてはならない存在

好例：合同防災訓練

令和５・６・７・８年度

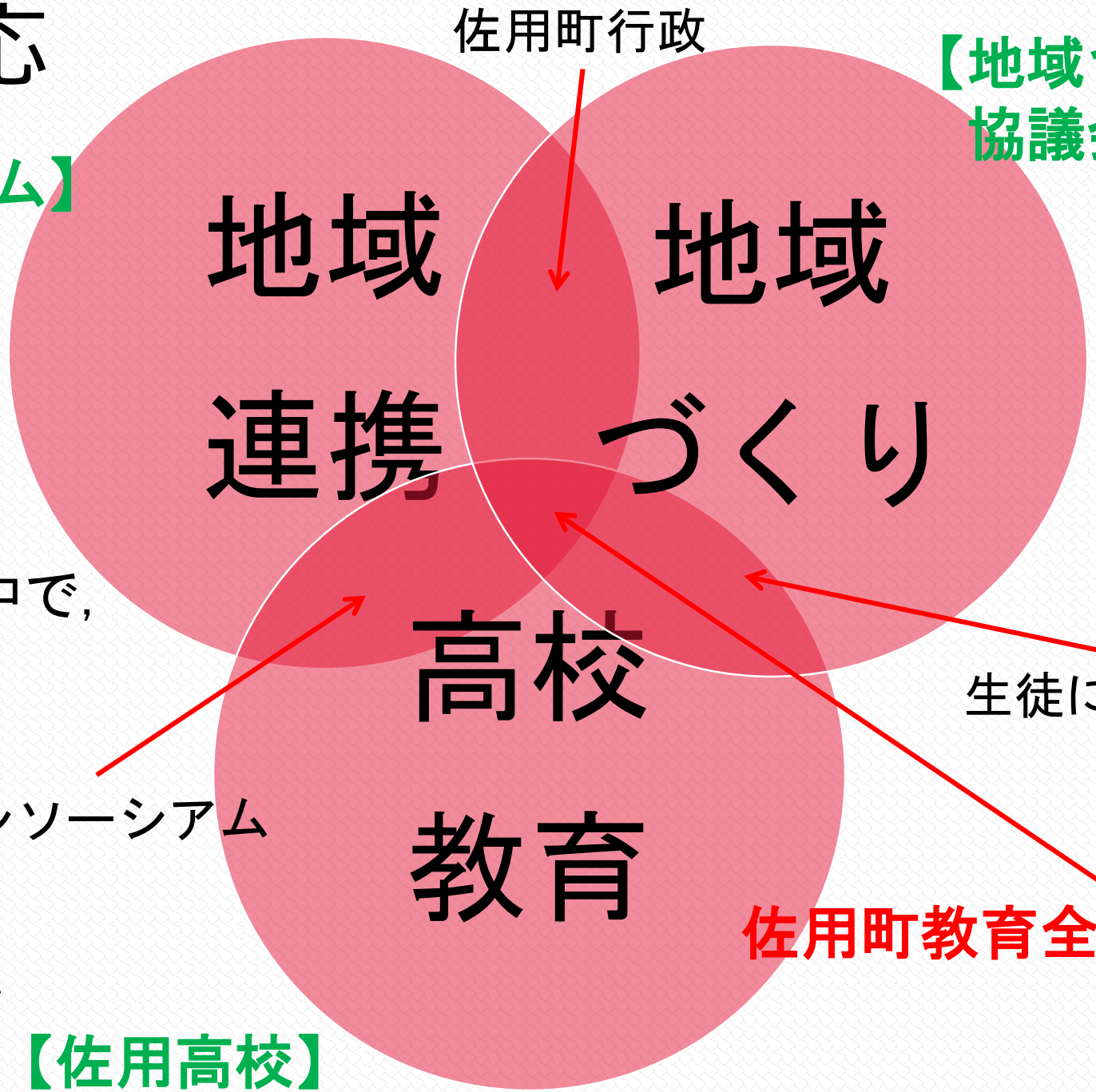
高校生として地域の活動に
参画する
例：自治会の会合
地域の清掃
イベントの担い手
地域づくり活動

社会人としての関わり

来年度は「提言」ではなく「仕掛けづくり」＋大人を動かす

目的に応じた対応

【テーマ型コンソーシアム】



【地域づくり協議会】

＜留意すべきポイント＞
設置者が異なる状況の中で，
現状は属人による支え

生徒による参画

コンソーシアム

佐用町教育全体の推進

大切なことはいかに
自走モードにしていくか
（一般化・システム化）

【佐用高校】

さらなる可能性

「私たちができること」の実行

・学校内での活動
・学校外での活動
↓
・高校卒業後、社会人として
↓
どのような人生を歩むか

学校特性を活かした学習

・普通科・農業科学科との連携
・南北（山陰・山陽），
東西（中国・近畿）を
結びつけるような立体的研究

・「学びのバトンリレー」
学習の成果をどう継続していくか

学年間の継続

◎高校生→地域
△地域の大人→高校生

大人の参画
（双方向の課題解決）

先生方・関係諸機関（佐用町役場等）の
指導・アドバイスのあり方
（教職員同士の情報交換）

（２）運営指導委員会実施報告

【第１回運営指導委員会】

１　日　時　　令和４年８月４日（木）１４：００～１５：００
２　場　所　　兵庫県立佐用高等学校　会議室
３　出席者
（１）運営指導委員
　　浅野　博之氏（佐用町教育長）
　　岸田　恵津氏（兵庫教育大学　教授）
　　江見　秀樹氏（佐用町企画防災課　課長）
　　田和　久典氏（IDEC 株式会社　新規事業開発部 LLP 事業推進グループマネージャー）
　　清水　道子氏（兵庫県教育委員会高校教育課　副課長）
（２）地域協働学習支援員　服部　憲靖氏（佐用町企画防災課）
　　地域協働アドバイザー　久保　正彦氏
（３）佐用高等学校　西坂　美樹（校長）、上田　貴哉（教頭）、岩﨑　由香子（教諭）、
　　本江　陽奈（教諭）、多々良　理奈（教諭）、高橋　智美（臨時講師）
４　次　第
（１）資料確認
（２）開会
　①　開会のことば
　②－１　校長挨拶（佐用高校　西坂校長）
・昨年度、控えていた教育活動を再開した。地域のイベントへの参加要望も来ている。生徒の活躍の場を確保したい。
・昨年度の取組は、委員の全ての皆様に協力いただき、充実した大きな成果を得られた。今年度は国の事業としては最後の３年目の集大成の年である。地域への還元のための生活改善の発展活動に取り組みたい。感染対策をしながら、拡充して活発化させたい。
　②－２　委員代表挨拶（佐用町教育委員会　浅野教育長）
・小中学校も予定通りに学校行事を実施した。夏休み前にコロナで学級閉鎖１クラスあった。夏休みに入り増加している。
・全国大会などの新聞記事を見た。佐用高校の名前が広がり、活躍することを応援したい。
（３）出席者紹介
（４）司会選出
（５）議事
　①　令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
　　(プロフェッショナル型)」研究開発事業計画について
　②　研究による成果について
　③　意見交換

清水氏（県教委）

・生徒の成長や行っていることが広がり、地域の方との繋がりも深まっている。様々なことが良い方向に向かっている素晴らしい取組である。
・生徒の積極性が見えるという報告があるように、外部からの人にも積極性が伝わっている。地域の方の支えや先生方の指導があるからできる。
・今年度で国からの指定はなくなる。取組の良い所をどう繋げていくのか。今からまとめながら、地域や県教委でも考えることが必要である。
・県の高等学校教育改革で、魅力・特色作りがメインだが、統廃合がクローズアップされている。統廃合（発展的統合）では、地域と繋がりながら学校を維持していく方法を考えることがメインである。佐用高校の取組が発展的統合や高校のあり方の見本になっていくのではないか。取組を様々な学校に紹介したい。最後のまとめの年なので協力しながらまとめていきたい。

田和氏（IDEC）

・３年目になり中身が具体的で充実してきている。
・生徒の積極性が表れている。商品開発で関わっているが生徒が自分達で実践している。何を作るか、レシピも生徒が自分達で考えて試行錯誤しながら決めていることに積極性を感じる。
・事業の目的意識を生徒が持って行動している。
・本当のカリキュラムが実施できる年なので、２学期、３学期に期待している。

浅野氏（教育長）

・３年目の成果が少しずつ表れている。
・食や佐用町を題材として、生徒に様々な力をつけていくのが大事である。
・失敗は成功のもと。失敗をしても、改善や自分を見つめて成功することにつながる。成功体験を積まなければ育たない。
・商品開発は試行錯誤して失敗を続けることで、自分が目指すところに向けて努力をする力が育つ。

④　指導助言

岸田氏（兵教大）

・専門学科のカリキュラムは難しい。
・「佐用町に佐用高校があり」というのが根付いている。目指すところは地域に不可欠な存在ということが伝わる。
・佐用町の小学校から高校での学校間連携が気を付けられている。
・カリキュラムの評価では、プロフェッショナル人材の育成ができている。カリキュラムの評価も大事だが、それぞれの人材で何を学んでどのような力がついたのかということも明確になりつつあり、提示してあるのが良い。
・３年間を通したカリキュラム配置ができつつある。

【第２回運営指導委員会】

１　日　時　　令和４年１２月５日（木）１４：００～１５：００
２　場　所　　兵庫県立佐用高等学校　会議室
３　出席者
（１）運営指導委員
　　浅野　博之氏（佐用町教育長）
　　岸田　恵津氏（兵庫教育大学　教授）
　　江見　秀樹氏（佐用町企画防災課　課長）
　　田和　久典氏（IDEC 株式会社　新規事業開発部 LLP 事業推進グループマネージャー）
　　清水　道子氏（兵庫県教育委員会高校教育課　課長）
（２）地域協働学習支援員　服部　憲靖氏（佐用町企画防災課）
　　地域協働アドバイザー　久保　正彦氏
（３）佐用高等学校　西坂　美樹（校長）、上田　貴哉（教頭）、小寺　由夏（教諭）、
　　本江　陽奈（教諭）、松本　奈実（教諭）、多々良　理奈（教諭）、
　　高橋　智美（臨時講師）、中田　真佑（臨時実習助手）
４　次　第
（１）資料確認
（２）開会
　①　開会のことば
　②－１校長挨拶（佐用高校　西坂校長）
・今後も感染防止に配慮し、地域との協働による学校教育推進事業を活性化させたい。
・産業教育フェア全国大会が青森で開催され、取組の成果を発表した。文部科学省の担当室長や調査官等の関係者の前で、笑顔で元気よく発表できた。三本柱の商品開発商品や、健康寿命の高齢者訪問サービス、安全安心な町づくりの合同防災訓練等の取組を発表した。更に工夫を凝らして進めたい。
　②－２委員代表挨拶（佐用町教育委員会　浅野教育長）
・上月小で食育の研究発表会を行った。西播磨で合同実施し１５０名弱が参加した。１年生は給食センターの仕事の様子や苦労を聞いた。大きな鍋や杓を見て佐用もち大豆の話を聞いた。５年生は鯵の３枚おろしをした。６年生は江戸時代の食事との違いを勉強した。食生活を見直す習慣ができたらよい。
・中学校でも食に関して行っている。食に興味を持った子が将来家政科に入って欲しい。
・佐用高校の存続の為に頑張りたい。
（３）出席者紹介
（４）議事
　①　令和４年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業
　　（プロフェッショナル型）」研究開発事業進捗状況について
　②　意見交換

清水氏（県教委）

・青森での発表は素晴らしい発表であった。県教委の課長や、文部科学省の調査官も佐用高等学校の生徒を誉めていた。
・プレゼン甲子園も自分達から進んで出る積極性が身についていて素晴らしい。
・３年間の研究をどうまとめるかが課題である。文部科学省の事業はカリキュラム開発が主たる目的である。指導案や評価だけでなく、どんな風に PDCA を回しているのかをまとめていただきたい。
・販売の映像で商品の説明があった。人からの感謝の言葉が、生徒の成長に伴うように先生方が行っているのではないか。当たり前のことだと思っているかもしれないが、素晴らしい指導である。
・アンケートをどう使うかがポイントである。アンケートは傾向や様子を見るものである。非認知能力の部分で生徒の変容をどうまとめるのかが課題となる。
・今後、佐用町から支援していただけるという素晴らしい話はとてもありがたい。町に評価していただきありがたい。
・佐用高校がなくてはならない存在だと町に言っていただきありがたい。先生方の頑張りで、そう言っていただける存在になった。是非兵庫県の学校の見本にしてもらえたらと思う。

田和氏（IDEC）

・発表の素晴らしさに感動した。発表に生徒自身の成長が見られた。
・地域の課題解決を通じてプロフェッショナル人材を育成するという目的で始まったプロジェクトであるが、発表の中であったようにコミュニケーション能力が特に成長した。自立や自主性などの主体性の成長もとても感じられた。

浅野氏（教育長）

・三本柱の取組を通して生徒にどんな力、どんな態度を身につけるかが大切である。主体的な態度が身についた。意欲的に学んで取り組んだ成果である。
・様々な目標を持って行うことは大切である。「これがしたい」や「これになりたい」だけの目標よりも、誰かの為に尽くす、地域の為に行うなど、自分以外のものに対しての目標を持つと更に努力を継続できる。取組の中で喜ぶ声が聞けたり、喜ぶ顔を見られたりすると、更に学ぶ気力に繋がって、コミュニケーション能力や自己肯定感が高まる。
・今後とも生徒の育成に力を注いでいただきたい。

③　指導助言

岸田氏（兵教大）

・素晴らしく、充実した内容であった。生徒だけでなく、先生方関係者の強い想いの表れである。
・アンケートの評価と調査等をどう使うかが課題である。個々の生徒がどう成長しているかには使えないので、ポートフォリオで見ていくのかと思う。
・今後、佐用町の協力で更に発展的に行うということだが、家政科に限らず農業科学科や普通科も一緒に取り組める可能性がある。学びの成果を確認しながら、農業科学科と連携、普通科の家庭科の時間に行う等、課題解決を相互的にすれば充実し、佐用町の取組を継続できるのではないか。

【第３回運営指導委員会】

１　日　時　　令和５年１月２２日（日）１１：４５～１２：００
２　場　所　　さよう文化情報センター　会議室
３　出席者
（１）運営指導委員
　　浅野　博之氏（佐用町教育長）
　　岸田　恵津氏（兵庫教育大学　教授）※リモート参加
　　江見　秀樹氏（佐用町企画防災課　課長）
　　田和　久典氏（IDEC 株式会社　新規事業開発部 LLP 事業推進グループマネージャー）
　　清水　道子氏（兵庫県教育委員会高校教育課　課長）
（２）地域協働学習支援員　服部　憲靖氏（佐用町企画防災課）
　　地域協働アドバイザー　久保　正彦氏
（３）佐用高等学校　西坂　美樹（校長）、上田　貴哉（教頭）、岩﨑　由香子（教諭）、
　　本江　陽奈（教諭）、高橋　智美（臨時講師）、中田　真佑（臨時実習助手）
４　次　第
（１）資料確認
（２）開会
　①　開会のことば
　②－１校長挨拶（佐用高校　西坂校長）
・３年間の感謝を申し上げたい。
・高い評価をいただけたのは、運営指導委員会やコンソーシアム委員の皆様の適切なご指導助言のおかげである。
・来年度からも目標を定めて取り組むので、ご指導をお願いしたい。
　②－２委員代表挨拶（佐用町教育委員会　浅野教育長）
・年々充実した発表であった。様々な取組を積極的に主体的に頑張っている。
・生徒が主体に取り組んでいるのは先生方のおかげである。生徒をやる気にさせる環境作りをしている。３年間、先生方の苦労と努力に感謝したい。主体的に動く生徒が育ったのは大きな成果で、佐用高校の宝である。
（３）出席者紹介
（４）議事
　①　意見交換
清水氏（県教委）
・来年以降に研究をどう活かし、自走するかが大切である。「生徒」「先生」「プログラム」の３つが自走しなくてはならない。家庭科の目標は家庭科で学んだことを自分の生活や社会に活かすことが大切である。自分のこととして主体となり、学びを活かして主体的に考えて動ける人間になっていくためのプログラムがとても大切である。３年間で生徒が主体的に動けるようになっていると思う。発展させながら生徒が自分で生き方を選んで自走できる人になって欲しい。

・誰でもある程度できて、プラスで特性が活きるような先生が自走できるプログラムを考えて欲しい。どんな所が大切で、どんなことを目標にして、何をするのか、体制をどう整えていくのか、人が変わってもできるように広めて欲しい。
・県教委には情報がたくさん集まるので、助言は可能である。
・佐用高校が佐用町と一緒に頑張っていただければと思う。

田和氏（IDEC）

・家政科だけではもったいないと思っていたので、来年は農業科学科や普通科に広げると聞いて、学科を超えて協働できるようなカリキュラムがあればと思う。
・民間やコンソーシアムのメンバーや役場がもっと関わるようになればと思う。美作市スポーツ医療看護専門学校やみかしほ学園との接点ができれば、生徒の役に立つような新しいアイデアが出てきて面白くなるのではないか。

浅野氏（教育長）

・成果は上がっている。教育の中で言えば、キーワードは「主体」「コミュニケーション能力」である。多くの人と協力して話し合って様々なことが出来るようになって欲しい。その力がついたのは大きな成果である。
・生徒がやりがいを感じたということは、達成感や充実感を感じたということである。
・自分の目標を達成するために資格が必要だから取りに行くという行動にも繋がっているのではないか。
・佐用高校は地域に貢献できる人づくりをしている。佐用の子であれば尚更良いが、別の地域の子でも佐用に魅力を感じて地域の貢献に繋げてくれたらよい。そういった人材育成を佐用高校がしているし、佐用高校に行けば人づくりをしてもらえるとＰＲできたら地元の子はもちろん、他の市町からも来てもらえる。佐用高校の特色の一つとして地域に貢献できる人づくりを今後も続けて欲しい。

② 指導助言

岸田氏（兵教大）

・充実した内容の発表であった。活動内容もプレゼンテーションもとても素晴らしい。
・食に関しては家庭科の教員養成でやっている内容とあまり変わらないくらいレベルの高い内容である。
・兵庫県の県教委では高校の食育が課題である。兵庫県の小中学校は食育推進レベルが高い。佐用高校の取組を食育の推進カリキュラムとしては家政科だけでなく、農業科学科も進んでいる。専門学科の推進としても良いのではないか。目標を食育の観点に従って作ればカリキュラムとして使える。家政科に限らず、汎用性として使える。

４　３年間の成果と課題

①具体的成果

令和２年度

○　家庭科技術検定　県内初の四冠王　１名

○　家庭科技術検定　三冠王　２名

□　商品開発　夢茜トマトジャム「西播磨フードセレクション 2020」金賞受賞

□　「第 21 回全国高校生ファッションデザインコンテスト」入選

□　「令和２年度佐用もち大豆コンテスト」2 作品入賞

令和３年度

○　家庭科技術検定　三冠王　３名

○　日本語ワープロ検定　２級　２名/準２級　１名

○　文書デザイン検定　２級　１名

□　「文書デザインコンテスト」審査員特別賞（1,480 作品中）

□　「令和３年度佐用もち大豆コンテスト」4 作品入賞

□　「第 22 回全国高校生ファッションデザインコンテスト」入選

令和４年度

○　家庭科技術検定　三冠王　４名

○　日本語ワープロ検定　準１位　１名/準２級　４名

□　「第２回プレゼン甲子園」決勝大会進出（411 組応募中 10 組）

□　「防災甲子園」はばタン賞受賞

□　「令和4年度防災力強化県民運動ポスターコンクール」佳作（762 作品中５作品）

□　「第 25 回全国高校生デザイン画コンクール」佳作

□　「ひめじエコレシピ博覧会」ポスターセッション　準優勝

□　「第 53 回 FHJ 日清製粉グループ全国高校生料理コンクール」学校賞受賞（257 校中 10 校）

□　「高齢者見守り事業啓発チラシ川柳」優秀賞

□　「第 23 回全国高校生ファッションデザインコンテスト」入選

②生徒の意識の変容　※　図1グラフ参照

生徒の意識調査を目的として令和4年7月にアンケートを実施した。家政科生徒の地域に対する意識の高さから本事業の成果として捉えることができる。

○佐用町内在住は、普通科生徒が一番多く約4割、次いで農業科学科で約3割、家政科が一番少なく1割以下である。

→　地域と協働するにあたってはまず、佐用町について学ぶことで「他人事」ではなく「わがこと」として主体的に学びに向かうことができる。

○「地域交流や貢献がしたいか」という質問では普通科が約6割、農業科学科が約8割なのに対して家政科は9割が肯定的である。

→　はじめに基礎知識や基本的技術を習得し、それぞれの事業に対しての目的意識もはっきりさせる

ことで地域との協働に対しての意識が高まった。また、交流者からの直接的な言葉がけにより、自己肯定感が高まり、次への意欲にもつながった。

③目標設定シートについて ※【別紙様式5】

本事業の実施にあたり、具体的に数値化した目標設定シートを作成した。令和 2 年度の計画段階で設定した数値を越える内容が多い中、課題も見られた。

【設定数値を越えた項目】

〇地域を良くするために、地域課題に関わりたいと思う生徒の割合
〇健康寿命を延ばす食生活の在り方を考え、提言した生徒の割合
〇佐用町の防災行事に参加した生徒の割合
〇家庭科技術検定（食物調理 1 級）取得生徒の割合
〇地域交流や体験的な学びに参加した生徒の割合（本事業対象生徒）
〇地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度
〇外部講師による講義や研究会の実施回数
〇商品開発に際し、関係機関と生徒の会議回数
〇郊外に向けてイベントなどで学びを発表する回数
〇各種コンテストに参加した生徒の割合
〇協働に際し、地域と企業で人材が参画した人数
〇校内外の探究活動などの教育活動に協力した地域の方々の延べ人数

目標達成項目については、協働先の協力や学校の体制が十分に機能した結果であり、カリキュラムの見直しが有効であった指標となった。

【設定数値に及ばなかった項目】

●高校卒業後、地元に貢献したいと思う生徒の割合
●高校卒業後、いずれは地元で働きたいと希望する生徒の割合
→ 本事業対象生徒が佐用郡外の生徒が多く、「地元」の表現を「佐用町」と捉えている。
●地域交流や体験的な学びに参加した生徒の割合（本事業対象生徒以外）
→ 学科間連携や教科間連携を推進し、学校全体の取組に発展できていなかった。
●地域の事が好きな生徒の割合
→ 本事業対象の 1～3年生全部に実施したアンケート結果である。3年生に限ると100％との結果が得られた。
●コンソーシアム委員会の開催回数
→ 運営指導委員会を含むと年間 6 回に達し、外部からの支援は十分に得られていた。

④9 つの力を身につけるために効果があった取組

研究開発の計画時に本事業における生徒に育成できる力の仮説を立てた。そして実際に事業を行うことで得られた具体的な効果と取組は以下のとおりである。

全ての力を向上させることに共通して考察できることは、企画段階から生徒に取り組ませたことである。

【事業全体の仮説】

「食」における探究活動では、地域と連携した取組を行うことで、地域の問題等に対する具体的な視点を持ち、ふるさと意識の醸成と課題解決のための目的意識がしっかり認識された探究活動となる。さらに専門機関との連携により、探究内容を深め、効果を上げることができる。また、校外の活動を通して、コミュニケーション能力を育成すると共に、研究成果を広報することで情報発信力を身につけることができる。

【事業全体の実証】

□ **コミュニケーション能力・企画力**

→ 商品開発会議や防災訓練企画会議など、教員ではなく外部講師主体の事業であったため、生徒は自ら考え、発言、進行を行うことで自然に身につけられた。また、商品の PR や防災訓練での講義や説明など、様々な場面で人に分かりやすく物事を伝える場面があったことも、力の向上に寄与した。

□ **ふるさと意識・ボランティア精神**

→ 「高校生訪問サービス」や「給食サービス」への参画によって実際に地域の高齢者らと交流することができ、現状を目の当たりにすることで他人事ではなく自分事としての取組になったことで身についた。自分の目の前にいる人の役に立ちたいと思える環境で活動できたことも要因である。

□ **プレゼンテーション能力・情報発信力**

→ 自分たちが行ってきた活動や取組を振り返る場面を必ず設定し、成果や反省・改善点を見出す時間をしっかりと設けた。そしてその成果や課題・分析内容を発表会やイベントなどで外部に発信することで自分の考えや具体的な研究成果を伝える力が身についた。

以上のことから、生徒は机上の空論で終わるのではなく、実際に地域に出て活動するというフィールドワークを重ねたことが、様々な力を向上させるには必要であったと思われる。コロナ禍という厳しい環境の中であったが、たくさんの体験活動を実施させていただけたことに協働先の方々には改めて感謝申し上げたい。

⑤考察と今後の課題

〇成果物やアンケートの具現化と「指導と評価の一体化」

→ 現在実施しているルーブリック評価ではまだまだ不足している部分が多くあるので、改善を行い次年度につなげる。生徒と作り上げるルーブリック評価表の作成を目指す。

〇学校全体での取組につなげるため、教科や学年、学科を越えてのカリキュラム・マネジメント

→ 次年度以降は家政科だけでなく学校全体での地域協働活動へと展開を予定している。そのためには学科間や教科間の意識に共通性を持たせる必要がある。

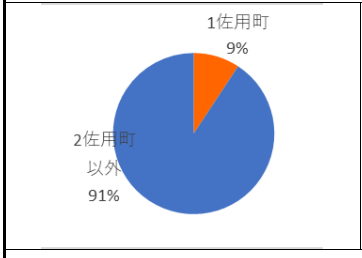
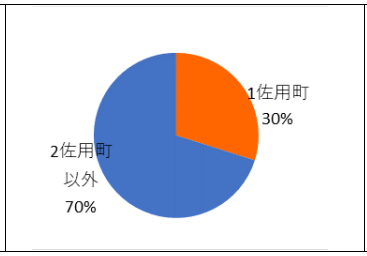
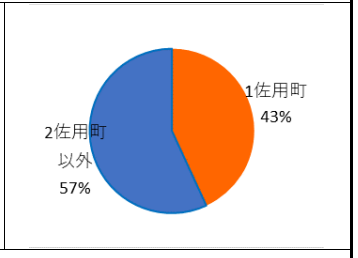
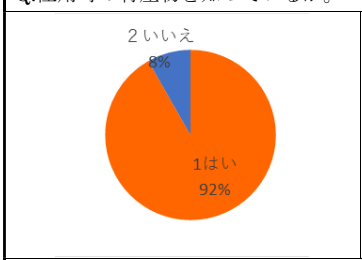
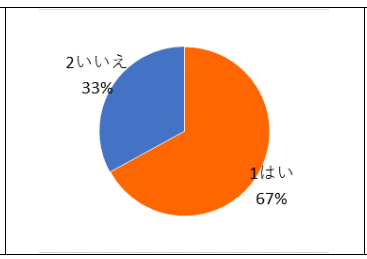
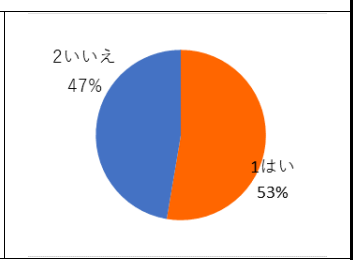
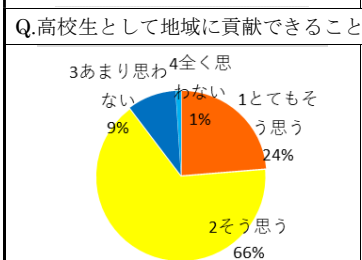
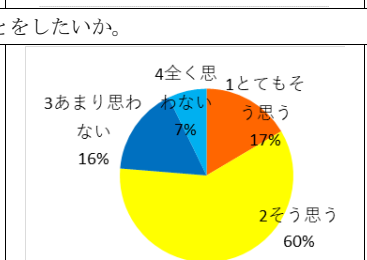
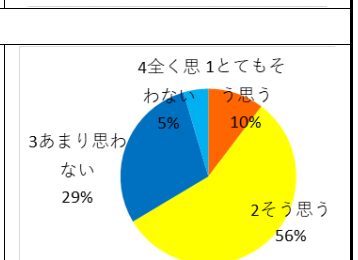
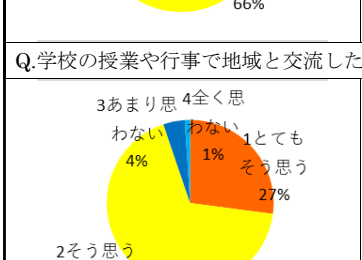
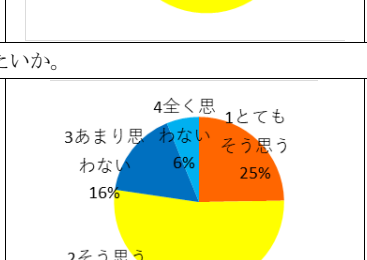
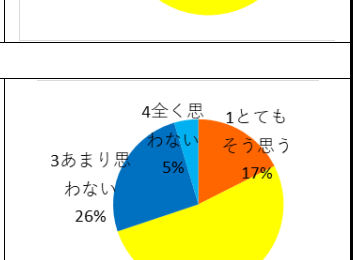
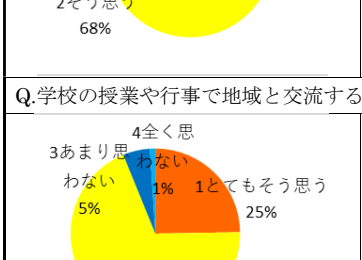
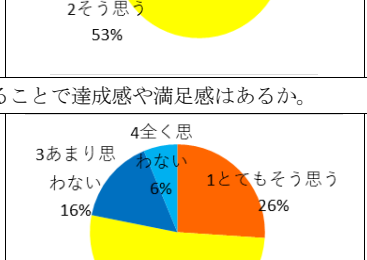
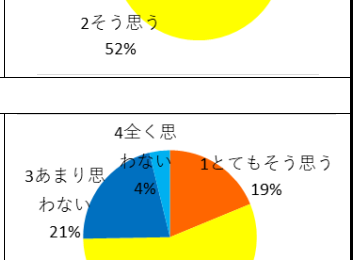
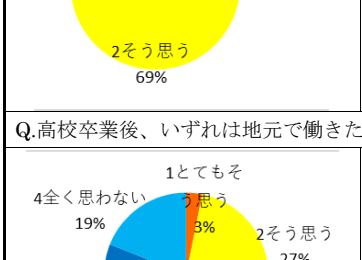
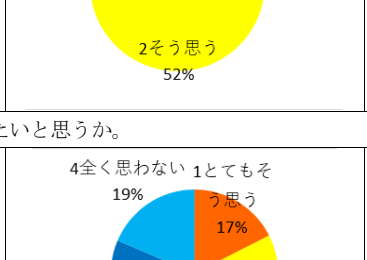
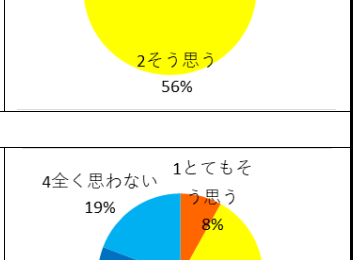
〇本事業の継続に向けて

→ 本事業の指定は今年度で終了するが、地域にとっても学校にとっても大変有意義な取組であるため、継続予定である。そのための支援を佐用町から受けることで、継続と発展につなげることができる。

〇国際的な視野に立ちグローバルな思考を身に付ける

→ コロナ禍のため積極的に実施できなかったが、地域の日本語学校に留学中の生徒や隣接県との協働活動や情報交換の環境を作ることで、広い視野とグローバルな知識と技術の習得を目指す。

（１）アンケート結果　【図１】

家政科（９７名）	農業科学科（９７名）	普通科（２６２名）
Q.あなたの現在の居住地はどこか。		
		
Q.佐用町の特産物を知っているか。		
		
Q.高校生として地域に貢献できることをしたいか。		
		
Q.学校の授業や行事で地域と交流したいか。		
		
Q.学校の授業や行事で地域と交流することで達成感や満足感はあるか。		
		
Q.高校卒業後、いずれは地元で働きたいと思うか。		
		

【別紙様式5】

ふりがな	ひょうごけんりつさようこうとうがっこう	指定期間	令和２～４
学校名	兵庫県立佐用高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業　目標設定シート

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		平成30年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	目標値（　年度）
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 地域をよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思う生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			90	87	90	80(R4)
	本事業対象生徒以外：	20	20	69	64	69	50(R4)
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 健康寿命を延ばす食生活の在り方を考え、提言した生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			30	58	100	80(R4)
	本事業対象生徒以外：	0	0	0	0	0	0
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 佐用町の防災行事等に参加した生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			100	100	100	100(R4)
	本事業対象生徒以外：	30	30	30	100	100	50(R4)
	目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 家庭科技術検定（食物調理１級）取得生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			100	100	100	100(R4)
	本事業対象生徒以外：	5	5	0	0	0	10(R4)
	目標設定の考え方：知識と技術の定着度合いをはかる。						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業後、いずれは地元で働きたいと希望する生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			43	32	31	70(R4)
	本事業対象生徒以外：	50	50	38	42	40	70(R4)
	目標設定の考え方：地元に愛着を持ち、就業することを目標としている。						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業後、地元に貢献したいと思う生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			62	64	63	80(R4)
	本事業対象生徒以外：	50	50	61	56	56	70(R4)
	目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 地域交流や「高校生訪問サービス」等の体験的な学びに参加した生徒の割合						単位：％
	本事業対象生徒：			100	100	100	100(R4)
	本事業対象生徒以外：	50	50	50	31	46	70(R4)
	目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度						単位：％
	本事業対象生徒：			88	96	94	90(R4)
	本事業対象生徒以外：	50	50	73	70	76	70(R4)
	目標設定の考え方：主体的な学びにつながっているかをはかる。						

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		平成30年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	目標値(令和4年度)
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標） 外部講師による講義や研究会の実施回数						単位：回
		3	3	13	22	25	20(R4)
	目標設定の考え方：研究開発の専門性を高めるために外部講師に委託する。						
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標） 商品開発に際し、関係機関と生徒の会議の回数						単位：回
		0	5	10	10	10	10(R4)
	目標設定の考え方：生徒が直接地域と方々と交流を持ち、課題に取り組む。						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標） 研究開発成果の発表会の回数						単位：回
		1	1	1	2	3	3(R4)
	目標設定の考え方：地域に開かれた学校づくりを目指す。						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標） 校外に向けてイベントなどで学びを発表する回数						単位：回
		3	3	3	8	11	10(R4)
	目標設定の考え方：研究開発の成果を広く校外に発信をする。						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標） 「食」、「福祉」等に関する各種コンテストに参加した生徒の割合						単位：％
		100	100	100	100	100	100(R4)
	目標設定の考え方：生徒の学びの到達度をはかる。						
c	（その他本構想における取組の具体的指標） 地域のことが好きな生徒の割合						単位：％
		50	65	67	75	76	90(R4)
	目標設定の考え方：地域に対する生徒の愛着度をはかる。						

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

		平成30年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度	目標値(令和4年度)
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） コンソーシアムの委員会の開催回数						単位：回
		0	0	2	3	3	4(R4)
	目標設定の考え方：研究開発の進捗状況をはかる。						
b	（その他本構想における取組の具体的指標） 協働に際し、地域と企業で人材が参画した人数						単位：人
		10	10	13	21	38	30(R4)
	目標設定の考え方：連携機関の充実度をはかる。						
b	（その他本構想における取組の具体的指標） 校内外の探究活動などの教育活動に協力した地域の方々の延べ人数						単位：人
		50	70	10	120	134	100以上(R4)
	目標設定の考え方：地域連携の充実度をはかる。						

＜調査の概要について＞

１．生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和２年度	令和３年度	令和４年度
全校生徒数（人）	625	587	558	490	456
本事業対象生徒数			108	95	97
本事業対象外生徒数			450	395	359

『「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成』
～佐用風土(Sayo Food)を活用したモデルプランの構築～

【研究開発の背景】

佐用町の強みと弱みを課題設定の主軸に捉え、佐用高校家政科での学びにリンクさせた上で、協働事業を考察することでカリキュラム開発に繋げる。その中で生徒のさらなる能力向上と地域への貢献を同時に展開することを目標とする。

佐用町の強み

- 「播磨国風土紀」が記す歴史と伝統
- 肥沃な土壌
- 兵庫・岡山・鳥取を結ぶHUB TOWN

佐用町の弱み

- 老年人口率40%（全国平均の1.5倍）
- 急激な人口減少（5年間で半減）
- 大規模河川災害

「食」に通じた、佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成

佐用高校課題解決３施策
- 「佐用風土(Sayo Food)」商品開発
- 「高校生訪問サービス」実施
- 「保存食・非常食」開発

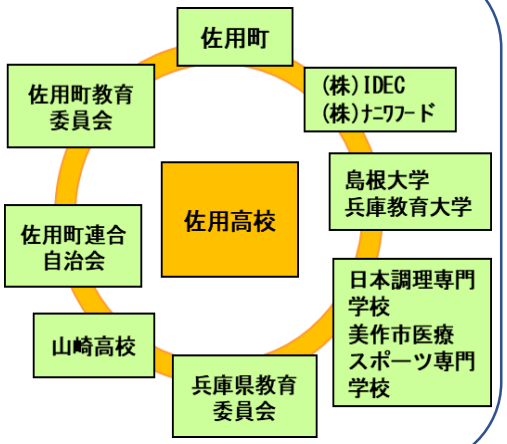
佐用町課題解決３方針
- 佐用の特産品を活用（商品開発・マーケティング）
- 佐用で暮らす人を守る（健康寿命延伸）
- 佐用の水害から学ぶ（安全安心な町づくり・災害レジリエンス）

【実施体制】

商品開発
佐用町×企業×佐用高校による商品開発会議を月に1回開催、商品化

健康寿命
佐用町社会福祉協議会×佐用高校によるボランティア活動の実施
佐用町教育委員会×佐用高校による食育活動

防災学習
佐用町企画防災課×佐用高校による防災学習



【令和４年度の目標】

〇三年間の取組で、生徒に課題発見解決力やコミュニケーション能力など９つの力を向上させる。
〇各分野においてフィールドワークでの学びを実施し、地域協働のシステムを確立させる。
〇段階を経た学びのスパイラルの中で、最終年度として学びや知識、技術を地域に還元する。

【取組状況】

協働先
- 佐用町
  企画防災課
  保健福祉課
  社会福祉協議会
- IDEC
- ナニワフード
- 佐用消防署
- 瓜生原亭
- 佐用保育園
- 利神保育園
- 子育て支援センター
- 佐用小学校
- 美作市スポーツ医療看護専門学校

佐用の特産品を活用（商品開発・食育活動・開発商品の広報・販売活動）

開発商品の広報即売会

高校生レストラン2022

佐用で暮らす人を守る（高齢者食生活調査・食改善レシピ開発）

高校生訪問サービス

給食サービス

佐用の水害から学ぶ（災害時保存食開発・避難時支援者育成）

防災訓練企画会議

佐用合同防災訓練

【成果】

商品開発
〇「佐用もち大豆と夢茜トマトスープ」の開発
〇「SOY STICK（佐用もち大豆バー）」の開発
〇特産品を使用した「食改善レシピ本」を地域に還元

健康寿命
〇専門学校での研修により福祉に関する専門知識と技術の習得
〇乳幼児から高齢者まで幅広い年代に対しての「食育」活動
〇地域高齢者に対する健康寿命延伸に向けた活動

防災教育
〇「佐用町合同防災訓練～KIZUNA大作戦～」を企画運営
〇小学校「防災出前授業」の実施と災害備蓄食の開発
〇「ぼうさい甲子園」での入賞と防災Jr.活動の実施

その他
　地域との協働による体験活動の中で生徒の主体性が育まれ、資格取得や学力向上意識の高まりがみられた一例
〇「全国プレゼン甲子園」決勝大会進出（10組/441組）
〇「エコレシピ博覧会」ポスターセッション準優勝
〇各種コンクールでの入賞と検定、資格取得率の向上

【課題】

- 高校卒業後、生徒自身の人生における主体性の確立
- 地域協働活動の継続と、自走に向けてのシステム構築
- 学校全体での活動体制作りと、高校魅力化の推進

5　資料

令和２年度入学生　実施教育課程

兵庫県立佐用高等学校

学年	学科	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
第１学年 令和２年度	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		化学基礎②		体育③			保健①	音楽Ⅰ② 美術Ⅰ② 書道Ⅰ②		C英語Ⅰ③			家庭総合④				生活産業情報②		フードデザイン②		ファッション造形基礎②		生活産業基礎①	総合的な探究の時間①	LHR①		
第１学年 令和２年度	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		化学基礎②		体育③			保健①	音楽Ⅰ② 美術Ⅰ② 書道Ⅰ②		C英語Ⅰ③			家庭総合④				生活産業情報②		フードデザイン②		ファッション造形基礎②		生活産業基礎①	総合的な探究の時間①	LHR①		
第２学年 令和３年度	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		生物基礎②		体育③			保健①	C英語Ⅱ②		音楽Ⅱ②美術Ⅱ② 書道Ⅱ②現代文Ｂ②		ファッションデザイン② 食文化②		生活と福祉②		※伝統文化②		生活産業基礎①	フードデザイン②		ファッション造形基礎②		服飾手芸②調理②		LHR①		
第２学年 令和３年度（案）	家政科	国語総合②		現代社会②		数学Ⅰ②		生物基礎②		体育③			保健①	C英語Ⅱ②		音楽Ⅱ②美術Ⅱ② 書道Ⅱ②現代文Ｂ②		調理② ファッション造形②		生活産業基礎①	生活と福祉②		※ヒューマンサービス②		フードデザイン②		ファッション造形基礎②		課題研究②		LHR①		
第３学年 令和４年度	家政科	現代文Ａ②		地理Ａ②		科学と人間生活②		体育②		C英語Ⅱ②		現代文Ｂ②※総合音楽② ※アートクラフト②※総合書道②		数学Ａ② 生活産業情報②		服飾手芸③調理③			子どもの発達と保育②		フードデザイン③			ファッション造形③			課題研究④				LHR①		
第３学年 令和４年度（案）	家政科	現代文Ａ②		地理Ａ②		科学と人間生活②		体育②		C英語Ⅱ②		現代文Ｂ②※総合音楽② ※アートクラフト②※総合書道②		数学Ａ② 生活産業情報②		ファッション造形③ 調理③			保育基礎②		※伝統文化②		※ヒューマンサービスⅡ②		フードデザイン②		※フードスペシャリスト②		課題研究②		LHR①		

注釈：　上段は現在の教育課程を反映しているが、本事業を行うにあたって下段のカリキュラムに変更予定である。
※は学校設定科目である。
従来からの変更点は、網掛けで示す。

令和４年７月２３日（土）　神戸新聞　朝刊

「佐用高生　３分野で全国大会」

佐用高生 3分野で全国大会

佐用高校の3年生4人が8月、写真とプレゼンテーション、ビジネスプランコンテストの3分野でそれぞれ全国大会に挑む。高校生活、最後の夏。大舞台を前に、佐用町役場を訪れた4人が目標や意気込みを語った。（勝浦美香）

プレゼン甲子園 岡本唯さん、百萌さん 高齢者福祉など活動紹介

ビジネスプラン 大樫蒼生さん 山林の活用策を熱く伝え

全国総文・写真部門 平井勝さん 父親の働く姿を切り取り

庵逧典章佐用町長から激励を受ける（右から）岡本唯さん、岡本百萌さん、大樫蒼生さん、平井勝さん＝佐用町役場

町役場訪れ意気込み語る

普通科の平井勝さん(18)は、全国高校総合文化祭（全国総文）の写真部門に出場する。平井さんは1年生の頃から同校写真部で活動し、部長も務めた。昨年11月の県総文で約200作品の中から10点のみに与えられる優秀賞を受賞し、初めての全国出場を決めた。

受賞作の「プロの視線」は、車の板金塗装業を営む父親の姿を活写したモノクロ写真。「父の働く姿を撮影してみたくて」と初めて被写体に選び、「一番かっこいい」と思う塗料を吹き付けるシーンを切り取った。プロとしての力強いまなざしや、仕事に向き合う姿勢を引き立てるため、あえてモノクロにしたという。

全国総文の写真展は今月31日～8月4日に東京都美術館である。約300点が集まり、入賞作30点の撮影者は最終日に表彰を受ける。平井さんは「まさか全国に行けるなんて」と驚きつつも「自分以上に父が喜んでくれたので、入賞してさらに喜ばせたい」と話す。

◆

高校生向けのビジネスプランコンテスト「高校生みんなの夢アワード」で全国に挑むのは、普通科の大樫蒼生（おうい）さん(17)。起業や経済に興味があり、勉強も兼ねてコンテストに応募することにした。

「佐用町の8割以上が森林」という新聞記事などをヒントに、山林を活用した施設整備や体験イベントを思いつき、事業案に仕立てた。慌ただしい選考スケジュールの中、動画による審査もあったが、山頂の広場で事業や町への思いを熱く語る動画を撮影し、決勝へと駒を進めた。

8月3日に東京である全国大会では、ファイナリスト10人がそれぞれ6分以内で事業案を説明する。プレゼンの資料は作成中といい、「収益率や資金など、甘い点はまだあるけど、本番までに磨きをかけて上位半分には食い込みたい」と笑う。

◆

家政科の岡本百萌（もも）さん(18)、岡本唯さん(17)は、8月20日に福井県である「全国高校生プレゼン甲子園」に出場する。大会テーマは「地域社会の持続可能性への提言」。同科ではこれまで、地域住民を巻き込んだ合同防災訓練や、高齢者宅への訪問サービスに取り組んでおり、「大会を通して活動を知ってもらいたい」と応募を決めた。

予選では3分間のプレゼン動画を審査され、応募のあった441組の中から10組のファイナリストに選ばれた。2人は決勝進出を喜び、「発表内容に共感してもらい、他の学校、地域にも取り組みを広めたい」と力を込めた。

令和４年１０月１８日（火）　神戸新聞　朝刊

「佐用高生とピザ作り体験」

佐用高生とピザ作り体験

生徒が開発したトマトソース使い

町内宿泊施設 特産品PR

佐用高校（佐用町佐用）家政科の生徒が開発した商品を使い、生徒と一緒にピザ作りを体験する「高校生レストラン」が、宿泊施設「グラミンカSAYO」（同町若洲）であった。宿泊客は地元のブランドトマト「夢茜（ゆめあかね）」のソース開発について話を聞きながら調理を楽しんだ。

同校では、佐用町の特産品を生かした商品作りや高齢化などの地域課題研究に取り組んでいる。高校生レストランは、家政科3年生の企画。夢茜の魅力や同科の活動を町内外に広めようと、昨年開発したトマトソースとカレーを使ったピザ作り体験会を年内に3回予定している。

宿泊者と一緒にピザを作る佐用高校の生徒＝佐用町若洲

初回は8日にあり、生徒12人と宿泊客22人が参加。生徒は生地の発酵を待つ時間を活用し、トマトやソースについて説明。「夢茜は大きさや自然な甘さが魅力」「ソースはどんな料理にも合い、災害備蓄食にもなる」などとPRした。

岡本唯さん(17)は「佐用の特産品の魅力が伝えられたと思う」とほほ笑んだ。

（真鍋　愛）

令和４年１２月１３日（火）　神戸新聞　朝刊

「佐用高生が企画　防災訓練」

佐用高生が企画 防災訓練

行政や消防など610人参加

高校生の誘導で避難する地域住民＝佐用高校

佐用高校（佐用町佐用）の生徒が企画し、行政や消防、大学が協力した合同防災訓練「KIZUNA（きずな）大作戦」が同校であった。佐用小学校の児童や地域住民ら約610人が参加。生徒の誘導やドローンからの放送に従って避難し、災害への備えを確認した。

昨年に続き2回目。訓練の計画や運営は佐用高校家政科の2年生が担当。関係者会議を開いたり、県立大学の木村玲欧教授＝防災心理学＝の講義を受けたりと、秋ごろから準備を重ねた。

9日の訓練は、地震が発生し、校内の一部も崩落したという想定で行われた。同科の生徒は、学校に集まった住民らを安全なルートでグラウンドに誘導。佐用小の児童は、非常食になるようにお菓子で作った首飾り「キャンディーレイ」を掛けて移動した。

避難後は無洗米や缶詰を使った炊き出しや、西はりま消防組合による救命訓練などもあった。

同科の中西琉那さん（16）は「高齢者もスムーズに避難できるように動線を意識した」。山脇楽々さん（16）は「小学生に災害の怖さを分かりやすく伝えるのが難しかったけど、イラストなどを使って興味を持ってもらえたと思う」と話した。

（真鍋　愛）

令和５年１月２６日（木）　神戸新聞　朝刊

「まちに笑顔を　高校生奮闘」

まちに笑顔を 高校生奮闘

特産トマトで商品開発、高齢者宅の訪問…

佐用高校で課題解決の取り組み

文部科学省の指定を受け、住民らと協力して地元の課題解決を目指してきた県立佐用高校（佐用町佐用）家政科が、3年間の研究期間を終えた。特産品を使った商品開発▽健康寿命の延伸▽災害に強い町づくり―を「3本柱」に設定。食に関する知識や技術を生かし、研究に取り組んできた。22日にさよう文化情報センター（同）であった成果発表会の内容から、これまでの活動を振り返る。（真鍋　愛）

㊤高齢者宅を訪ね、住民と交流する生徒＝佐用高校提供　㊦佐用の特産品でピザを作った「高校生レストラン」＝佐用町若狭

課題の一つ「商品開発」で目を付けたのは、町内で生産、加工される特産品。生産者や企業などの意見も取り入れながら、五つの商品を完成させ、姫路市のイベントなどで販売した。

中でも高い評価を得たのは、ブランドトマト「夢西」を使ったジャム。西播磨県民局のコンテストで金賞に選ばれた。また、トマトスープや「佐用もち大豆」を加えたトマトカレーは、災害備蓄食を意識して考案したという。

昨年10月、宿泊施設「グラミンカSAYO」（同町若狭）で「高校生レストラン」を開催。トマトソースとトマトカレーを使ったピザ作り体験を企画した。生地の発酵を待つ間、開発商品を紹介し、参加者から「どこで売っているか？」「トマトの特徴は？」など、質問が相次いだ。担当メンバーの岡本唯さん(18)は「特産品をPRできた」と手応えを口にした。

3年間の成果発表　「一から考え知識深まった」

佐用で生まれ育った高校生にとっても、避けては通れない課題が、地元の高齢化問題だ。全国平均の約1・5倍という町の高齢化率43・2％（2020年度）に、どう向き合うのか。

生徒はまず、岡山県の専門学校や町の担当者から講義を受け、要介護者や認知症など高齢者に関する知識を学んだ。高齢者宅の訪問サービスを独自に始めたほか、町社会福祉協議会の給食サービスにも携わった。

昨年12月、最後の訪問サービスの際には、全世代向けに考案した冊子「食改善レシピブック」をプレゼントした。がんや動脈硬化、高血圧予防につながる食材を使った料理18品を紹介しており、生徒たちが高齢者に「健康に役立てて」と手渡した。家政科3年の岡田明夏さん(18)は「高齢者から直接話を聞いて、『地域のための研究』という実感を持てたと振り返る。

過去には、2009年の県西・北部豪雨で18人の死者と2人の行方不明者が出た同町。近隣には、岡山県東部から兵庫県南東部にかけて分布する活断層帯「山崎断層」もあり、地震など災害から命を守る備えも欠かせない。

家政科の2年生は21、22年の計2回、行政や消防、地域住民に協力を呼びかける合同防災訓練「KIZUNA大作戦」を企画、運営した。訓練後は、新聞紙を使ったスリッパ作りに加え、ポリ袋に入れた食材を湯煎する災害食「パック調理」なども実施。食の体験も取り入れ、地域ぐるみで減災について考えてもらえるように工夫している。

初回の運営に携わった三上愛羅さん(18)は「一から企画を考えたことで、自分自身も防災や減災について知識が深まった」とほほ笑む。

地域と協力した合同防災訓練＝佐用町佐用

佐用新聞

次回28日は「はりまスポーツ新聞」です

主体性や積極性　生徒の意識に変化

活動前後の感想 AIが分析

わが町の課題に向き合ってきた高校生たちには、意識に変化もみられた。「先生に言われなくても、主体的に取り組めるようになった」「積極性が身についた」。成果発表会で、生徒たちは、たびたび口にした。

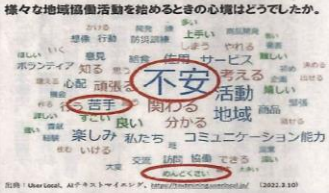
生徒の感想から人工知能（AI）が作成した「テキストマイニング」を比較すると、活動前は「不安」「苦手」「めんどくさい」などの後ろ向きな言葉が目立った。しかし、初年度の活動が終わる頃には「頑張る」「うれしい」「成長」など、前向きな表現が増えるようになった。

発表会では、外部講師から「使命感を持ち、地域の一員として活動できている」と、講評を受けた。運営委員として研究に協力した久保正彦さん(65)は「自分で問題に気付き、解決する能力を身につけた生徒は、社会でも活躍できる」と期待を寄せる。

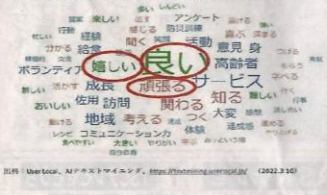
研究は2022年度で終了するが、同校は「23年度は普通科と農業科学科も参加し、地域と協力して事業を続けたい」とする。生徒たちも発表会をこう締めくくった。

「私たちの活動で、佐用を笑顔にします！」

様々な地域協働活動を始めるときの心境はどうでしたか。



地域協働活動を行ってきて、今どのような心境ですか。



出典：UserLocal、AIテキストマイニング、https://textmining.userlocal.jp/　(2022.3.10)

研究活動前のアンケート結果を基に、人工知能が作成した「テキストマイニング」（上）と、初年度の活動後に前向きな表現が増えた「テキストマイニング」―いずれも佐用高校提供

令和２年度指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）
研究開発実施報告書【３年次】

発行日　令和５年３月

発行者　兵庫県立佐用高等学校
〒679-5381
兵庫県佐用郡佐用町佐用２６０番地
ＴＥＬ　０７９０－８２－２４３４
ＦＡＸ　０７９０－８２－２７１９
ＨＰ　http://www.hyogo-c.ed.jp/~sayo-hs/

兵庫県立佐用高等学校